（調査研究報告書）

マスク着用の親と子の感情認識とウェルビーイングへの影響

― 大規模 WEB 実験調査を用いた検証 ―

岩﨑敬子（ニッセイ基礎研究所　准主任研究員）
村松容子（ニッセイ基礎研究所　主任研究員）

目次

1. はじめに……2

2. 調査研究の概要……3

3. アンケート調査の回答を用いた分析結果……4
3.1 子育て中の人のコロナ禍前後でのマスクをつける頻度の変化……4
3.2 小・中学生のコロナ禍前後でのマスクをつける頻度の変化……12
3.3 子育て中の人のコロナ禍でのマスク着用/外すことの不快度合の変化…19
3.4 小・中学生が感じるマスクをつけること/はずすことの「いやさ」……22
3.5 子育て中の親は、マスク着用をどう感じているか？……30
3.6 小・中学生は、マスク着用をどう感じているか？……36
3.7 コロナ禍における子育てについての親の思い……41

4. 実験を用いた分析結果……45
4.1 マスク着用が表情認識に与える影響……45
4.2 マスク着用が周りの人の感情に与える影響……52

5. まとめ……60

1. はじめに

人生 100 年時代を迎え、人々の願いは「生きること」から、「健康に生きること」、つまりウェルビーイングにシフトする中、生命保険業界に求められる役割も、「死」への保障から、「ウェルビーイング」のサポートに変化してきた。

コロナ禍では感染予防のために外出機会が減ることで、体力や運動能力が低下するなどウェルビーイングの低下が懸念されている。そして現在議論になっているのが、マスク着用に対する考え方だろう。マスクは、感染拡大を抑止する効果が期待できるが、皮膚トラブルや口呼吸による健康への害が指摘されている。また、相手の表情が読み取りづらいことで、コミュニケーションを阻害するといった懸念も指摘されている。さらに、情動伝染による幸せな気持ちの伝達を阻害している可能性も考えられる。しかし、マスク着用の常態化が人々の感情認識やウェルビーイングにどのような影響を及ぼすか国内外での研究蓄積は少なく、一致した見解は出ていない。特に影響が大きいと考えられる子どもへの影響の検証を行った研究は、国内でも国外でもほとんど存在しない。

そこで、本研究は、親子を対象とした大規模実験によって、マスク着用の感情認識とウェルビーイングへの影響を厳密に検証し、感染症対策とウェルビーイングを両立させるための考察の一助としようとするものである。

本稿は次のように構成される。第 2 節で調査研究の概要を紹介し、第 3 節では私達が実施した WEB 調査のうちアンケート調査の回答部分を用いた分析結果を報告する。具体的には、親子それぞれのコロナ禍でのマスクの着用頻度の変化、親子それぞれのマスクをつけることや外すことへの感じ方、コロナ禍での子育てについての親の思いについて分析した結果を報告する。続いて第 4 節では、WEB 調査のうち実験の回答部分を用いた分析結果を報告する。具体的には、マスク着用の表情認識への影響と情動伝染への影響についての分析結果を報告する。そして第 5 節を本稿のまとめとする。

2. 調査研究の概要

マスクの着用の感情認識/健康/幸福/感情への影響に関する先行研究の調査を実施した上で、以下の WEB 調査を実施した。

【WEB 調査実施時期】

2022 年 10 月

【WEB 調査対象者】

新型コロナ感染症（以下「コロナ」と記す。）の拡大前の 2019 年 3 月からニッセイ基礎研究所が毎年実施してきたパネル調査回答者(18 歳～64 歳被用者、回答者数は各年 6000 程度)を中心に、全国の 24～64 歳男女で、小学生から中学生の同居の子のいる方を対象とした[1]。調査回答は、有職者男性:無職者男性:有職者女性:無職者女性の割合が、なるべく全国の分布[2]に近づくよう配信した上で、ご協力いただける方から回収を行った[3]。回答数は親子 1,000 組である[4]。

【WEB 調査の内容】

WEB 調査には、親の回答者と子の回答者のそれぞれに対して、以下の 1 と 2 のパートが含まれた。それぞれの詳細については、事節以降の分析結果の説明を参照。

1. マスクの着用状況やマスクへの不快度等に関するアンケート調査
2. マスクの表情認識及びウェルビーイングへの影響を検証する WEB 実験

---

[1] 株式会社クロス・マーケティングのモニター会員

[2] 令和 3 年国民生活基礎調査の児童有の人の有職者無職者の分布

[3] 配信時に分布を考慮したが、回収時の割付は行っていない。

[4] 任意の協力の下、調査会社のモニター会員を対象にして行った調査であること、小・中学生の子のいる人でかつ子に調査に協力頂くことができる人に回答頂いた調査であること、子の年齢や性別について回収時に分布の調整等は行っていないことから、本調査の分布は必ずしも日本全体の分布を示しているとは限らない点に注意が必要である。

3. アンケート調査の回答を用いた分析結果

3.1　子育て中の人のコロナ禍前後でのマスクをつける頻度の変化[5]

3.1.1　はじめに

政府は、2022 年 5 月から、屋外では季節を問わずマスクの着用は原則不要で、屋内でも会話をほとんど行わないような場合にもマスクの着用は不要と案内している[6]。しかし、2023 年 1 月現在も、場面に関わらず、多くの人がマスクを着用しているのではないだろうか。本項では、WEB 調査のアンケート調査回答部分の回答を用いて、コロナ禍前後のマスクをつける頻度の変化について、男女、年齢層、子どもの持病の有無別に確認した分析結果を紹介する。本稿で紹介する結果は、親のマスクをつける頻度の変化についての親自身による回答の分析結果である。

結果を先取りしてお伝えすれば、コロナ禍前と 2022 年 10 月の調査時点を比べると、子育て中の人のマスクをつける頻度は大きく増加したが、特に、男性よりも女性、低年齢層（34 歳以下）よりも高年齢層（55 歳以上）の人々の間でマスクをつける頻度が増加した傾向が見られた。また、子どもに持病がある場合は、育児分担割合が大きいほど、外出時に常にマスクをつける頻度が増えた傾向が示唆された。

3.1.2 男女別マスクをつける頻度のコロナ禍前後の変化

まず男女別に、外出時[7]にマスクをつける頻度を確認したのが図 3.1.1 である。コロナ禍前の分布については、男性と女性で大きな違いは見られないが、2022 年 10 月現在の分布を見ると、「常につけている」人の割合が、男性よりも女性の方が大きい傾向が見られる[8]。

---

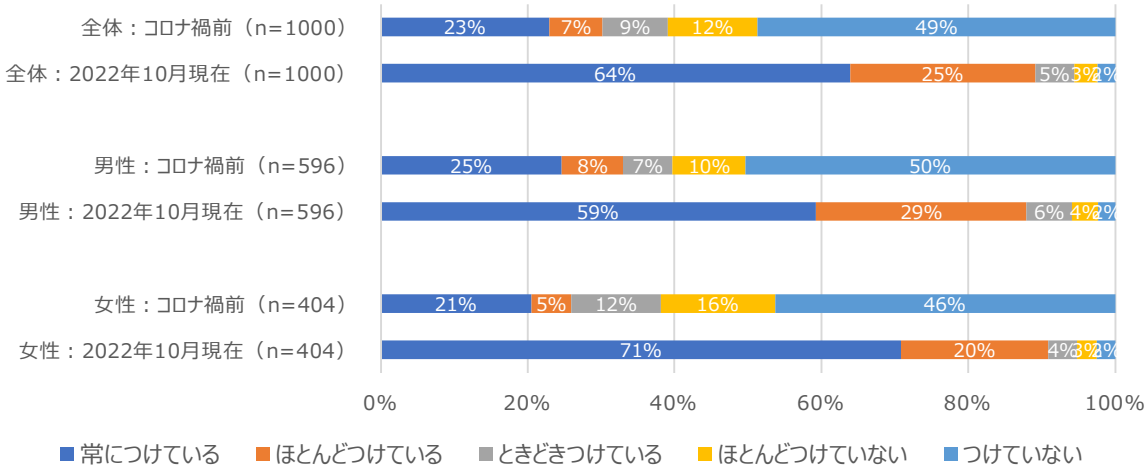
[5] 本項で報告する結果は、以下に掲載された結果にもとづく。
岩崎・村松（2023.1.13）「子育て中の人々のコロナ禍前後のマスクをつける頻度の変化」基礎研レポート（https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=73600?site=nli、2023/1/26 アクセス）

[6] 厚生労働省（https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000942851.pdf, 2022/12/27 アクセス）

[7] 「外出時」については、質問の際、以下のように注記をしている「買い物時や散歩等、目的に応じて異なる場合は、総合的な頻度でお答えください」

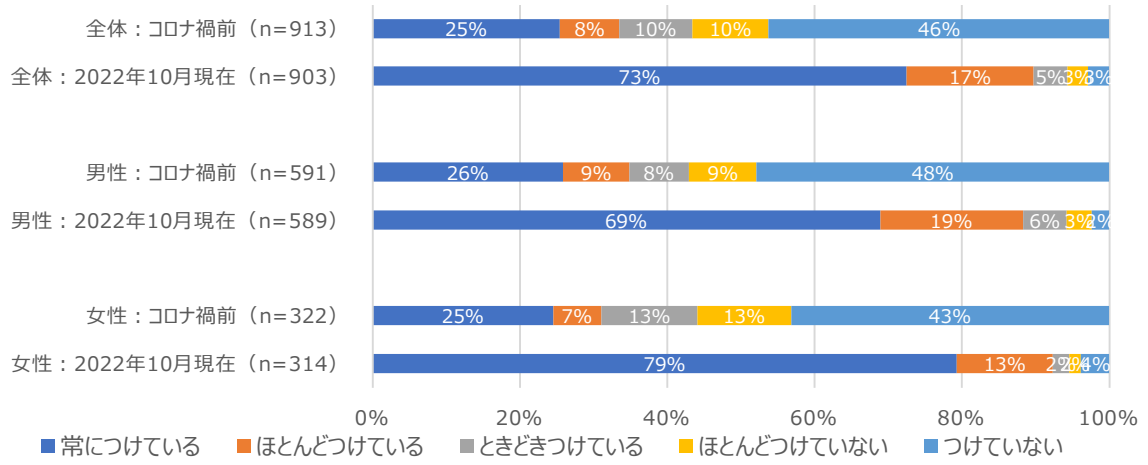
[8] 後の項の表 1.1 で紹介する回帰分析の結果からも、男性よりも女性の方が、外出時に常にマスクをつけている人の割合が大きい傾向が確認できる。

図3.1.1 外出時マスクをつける頻度　（男女別）



同様に、男女別に、職場でマスクをつける頻度を確認したのが図 3.1.2 である。こちらについても、コロナ禍前の分布については、男性と女性で大きな違いは見られないが、2022 年 10 月現在の分布を見ると、「常につけている」人の割合が、男性よりも女性の方が大きい傾向が見られる[9]。

図3.1.2 職場でマスクをつける頻度　（男女別）



注）主婦／主夫、無職、職場がないに該当する方は含まれていない。

[9] 図 3.1.2，図 3.1.4，図 3.1.6 で、コロナ禍前と 2022 年 10 月現在での n が異なっているのは、職場があると答えた人の数が変わっているからである。後の項の表 3.1.2 で紹介する回帰分析の結果からも、男性よりも女性の方が、職場で常にマスクをつけている人の割合が大きい傾向が確認できる。

3.1.3 年齢層別マスクをつける頻度のコロナ禍前後の変化

次に、外出時にマスクをつける頻度を年齢層別に確認したのが、図 3.1.3 である。最も低い年齢層である 34 歳以下の回答者の間では、その他の年齢層に比べて、コロナ禍前にマスクを「常につけている」と回答した人の割合は最も大きく、コロナ禍前にマスクを「つけていない」と回答した人の割合は最も小さい。しかし、2022 年 10 月現在では、マスクを「常につけている」人の割合は、その他の年齢層に比べて最も小さくなっている。

一方で、最も高い年齢層である 55 歳以上の回答者の間では、コロナ禍前に外出時にマスクを「常につけている」と回答した人の割合はその他の年齢層に比べて最も小さく、コロナ禍前にマスクを「つけていない」と回答した人の割合はその他の年齢層に比べて最も大きい。しかし、2022 年 10 月現在でマスクを「常につけている」人の割合は、34 歳以下を除くその他の年齢層と同程度となっている。低年齢層よりも高年齢層が、コロナによって、外出時に、よりマスクをつけるようになったということが示唆されるかもしれない。

同様に、職場でマスクをつける頻度について年齢層別に確認したのが、図 3.1.4 である。こちらからも、外出時にマスクをつける頻度の年齢層別で見られた傾向と同様の傾向が確認できる。つまり、低年齢層（34 歳以下）ではコロナ禍前からマスクを常につけている人の割合が大きいが、2022 年 10 月現在ではマスクを常につけている人の割合がその他の年齢層に比べて小さいことと、高年齢層（55 歳以上）では、コロナ禍前はマスクをつけていない人の割合が大きいが、2022 年 10 月現在では、マスクをつけている人の割合は、34 歳以下を除くその他の年齢層と同程度である傾向が見られる。

職場においても、低年齢層よりも高年齢層が、コロナによって、よりマスクをつけるように行動変容したことが示唆されるかもしれない。

図3.1.3 外出時にマスクをつける頻度　（年齢層別）

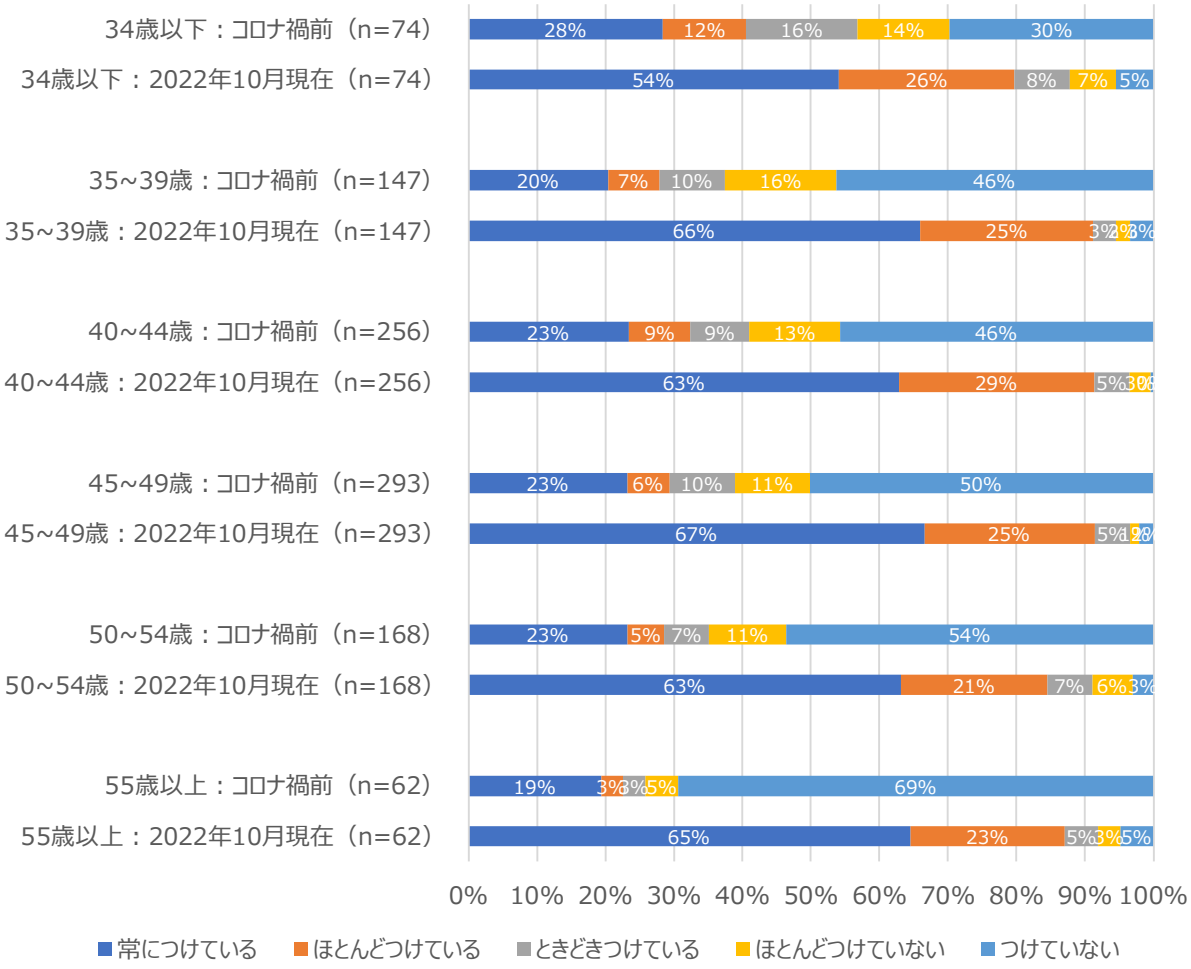
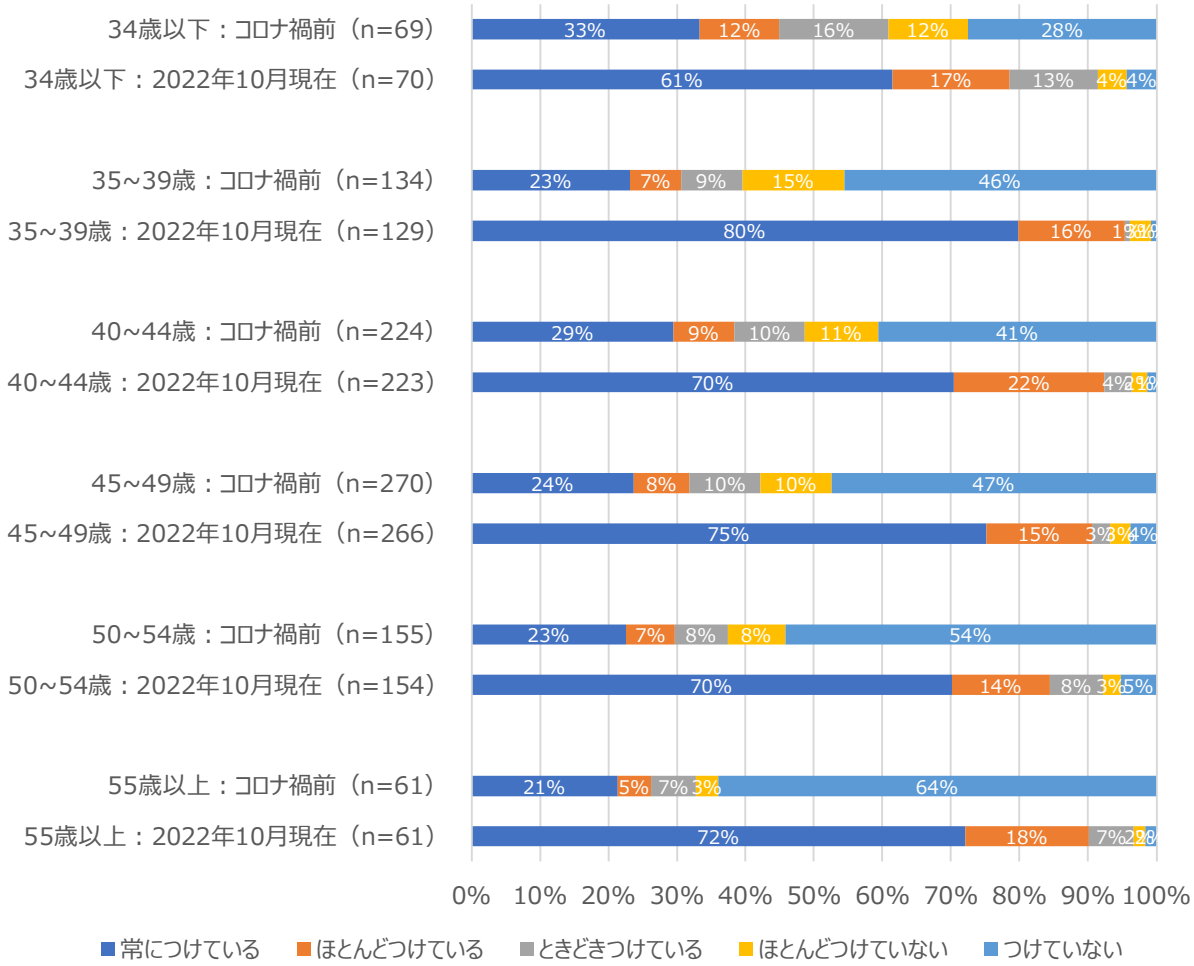


図3.1.4 職場でマスクをつける頻度　（年齢層別）

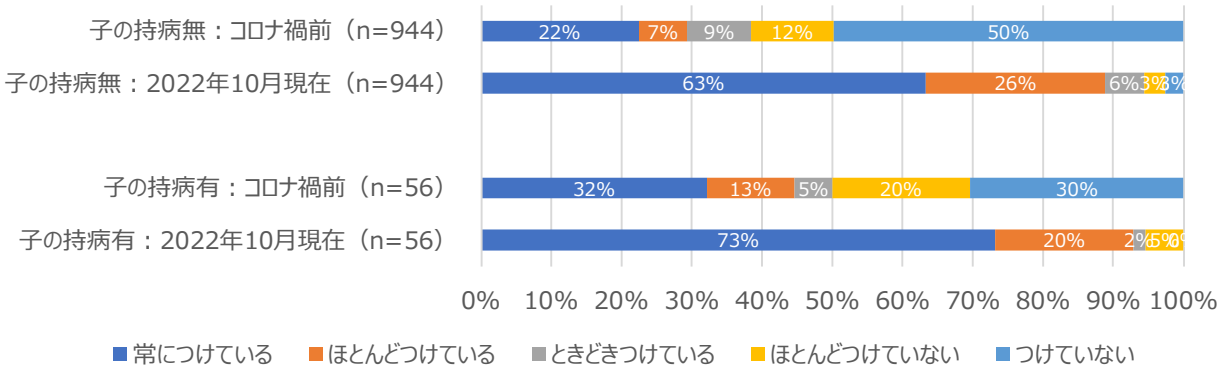


注）主婦／主夫、無職、職場がないに該当する方は含まれていない。

3.1.4 子どもの持病の有無別マスクをつける頻度のコロナ禍前後の変化

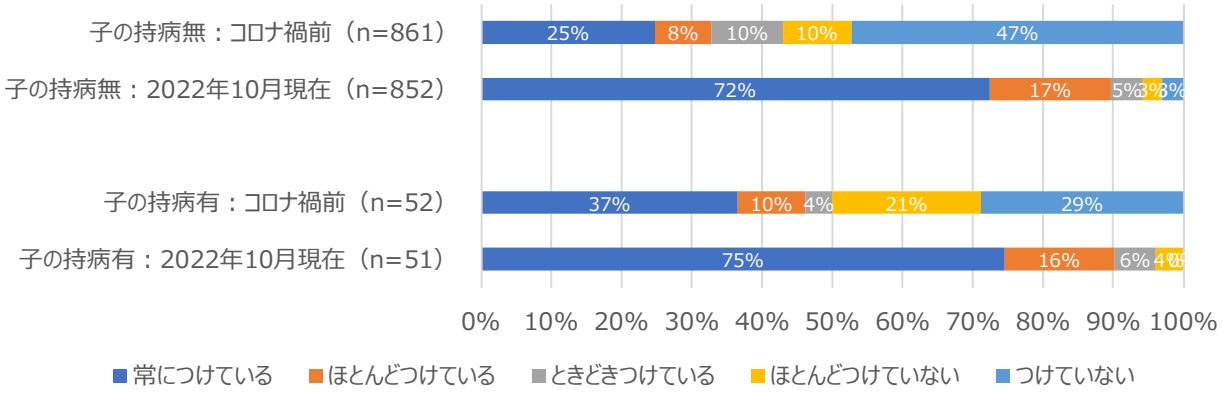
さらに、本調査は子育て中の人々を対象にしているため、子の持病の有無によっても、マスクをつける頻度が異なる可能性が考えられるかもしれない。そこで、外出時にマスクをつける頻度を、子の持病の有無別に確認したのが、図 3.1.5 である。子の持病がある場合、子の持病の無い人に比べて、コロナ禍前から常にマスクをつけている人の割合が大きい傾向が見られる。2022 年 10 月時点でも子の持病がある人の方がマスクを常につけている人の割合は大きいが、子の持病が無い人に比べて、差が開いた傾向は見られない。

図3.1.5 外出時にマスクをつける頻度　（子の持病有無別）



加えて、職場でマスクをつける頻度を、子の持病の有無別に確認したのが、図 3.1.6 である。子の持病がある場合、子の持病の無い人に比べて、コロナ禍前から常にマスクをつけている人の割合が大きい傾向があるのは、図 3.1.5 で確認した外出時の傾向と同様である。そして、2022 年 10 月時点では、子の持病の有無によって、常にマスクをつけている人の割合に大きな違いは見られない。

図3.1.6 職場でマスクをつける頻度　（子の持病有無別）



注）主婦／主夫、無職、職場がないに該当する方は含まれていない。

3.1.5. 子どもの持病の有無と育児分担割合とマスクをつける頻度の関係

子どもの持病の有無によってマスクをつけるようになるかどうかは、普段子どもとどれくらい関わっているかに依存する可能性が考えられる。そこで、育児分担割合とマスクをつける頻度の関係を確認するために行った線形確率モデルの推定結果が表 3.1.1 と 3.1.2 である。

表 3.1.1では、被説明変数を、2022 年 10 月時点で外出時に常にマスクをつけてい

る場合に1を取り、それ以外の場合に0を取るダミー変数とし、表 3.1.2 では、2022 年 10 月時点で、職場で常にマスクをつけている場合に1を取り、それ以外の場合に0を取るダミー変数としている。表 3.1.1からは、子どもの持病有×育児分担割合の交差項が正で統計的に有意（有意水準 10%未満）であり、育児分担割合が大きい人ほど、コロナ禍でマスクをつけていることが確認できる（列 2）。さらに、コロナ禍前に常にマスクをしていたかどうかを調整したモデルでも同様の傾向が確認できる（列 4）。一方で、表 3.1.2 の推定では、子どもの持病有×育児分担割合の交差項は（列 2 の推定、列 4 の推定共に）統計的に有意でなく、外出時にマスクをつける行動と同様の傾向は確認されなかった。

3.1.6. おわりに

本項では、アンケート調査部分の回答を用いて、コロナ禍前後のマスクをつける頻度の変化について、男女、年齢層、子どもの持病の有無別に確認した分析結果を紹介した。コロナ禍前には、外出時や職場で常にマスクをつけている人の割合は、男女で大きな違いは見られなかったが、2022 年 10 月時点で、外出時や職場で常にマスクをつけている人の割合は男性よりも女性の方が大きかった。また、年齢層別に比較すると、コロナ禍前には低年齢層（34 歳以下）でマスクを常につけている人の割合が大きく、高年齢層（55 歳以上）ではマスクをつけていない人の割合が大きかったが、2022 年 10 月時点では、低年齢層（34 歳以下）でマスクをつけている人の割合は小さく、高年齢層（55 歳以上）では、34 歳以下を除くその他の年齢層と同程度であった。これらから、コロナ禍でマスクをつけるようになるという行動変容は、男性よりも女性の間で、そして低年齢層よりも高年齢層でより顕著に起こった傾向が示唆された。また、子どもに持病がある場合は、育児分担割合が大きいほど、外出時に常にマスクをつけるようになった傾向が見られた。

ポストコロナの社会で、日本の人々は今後どのようにマスクと付き合っていくことになるのだろうか。人々がマスクをつける理由について今後分析を深めるとともに、動向を注視していく必要があるだろう。

表 3.1.1. 外出時に常にマスクをつけている人の傾向

	(1)	(2)	(3)	(4)
女性ダミー	0.137***	0.117**	0.157***	0.154***
	(0.0316)	(0.0475)	(0.0301)	(0.0430)
年齢	0.00560**	0.00595***	0.00662***	0.00687***
	(0.00228)	(0.00230)	(0.00212)	(0.00213)
子どもの持病有	0.0978*	-0.0616	0.0601	-0.111
	(0.0586)	(0.125)	(0.0572)	(0.120)
子育て分担割合		0.00280		-0.000882
		(0.00773)		(0.00688)
子どもの持病有×育児分担割合		0.0313*		0.0333*
		(0.0187)		(0.0183)
コロナ禍前に常にマスクをしていた人ダミー			0.388***	0.389***
			(0.0249)	(0.0249)
N	1000	1000	1000	1000
自由度調整済決定係数	0.019	0.019	0.134	0.134

注）線形確率モデルの推定結果。被説明変数は、2022 年 10 月時点で、外出時に常にマスクをつけている場合に 1 を取り、それ以外の場合に 0 を取るダミー変数。( )内には頑健な標準誤差を表示。切片の係数の表示は省略。

+ p<0.15、* p<0.10、 ** p<0.05、 *** p<0.01

表 3.1.2. 職場で常にマスクをつけている人の傾向

	(1)	(2)	(3)	(4)
女性ダミー	0.120***	0.125***	0.131***	0.157***
	(0.0314)	(0.0474)	(0.0301)	(0.0435)
年齢	0.00395*	0.00393*	0.00550***	0.00526**
	(0.00226)	(0.00227)	(0.00212)	(0.00213)
子どもの持病有	0.0188	0.00794	-0.0220	0.000517
	(0.0612)	(0.118)	(0.0573)	(0.109)
子育て分担割合		-0.00119		-0.00566
		(0.00761)		(0.00690)
子どもの持病有×子育て分担割合		0.00223		-0.00517
		(0.0201)		(0.0183)
コロナ禍前に常にマスクをしていた人ダミー			0.331***	0.333***
			(0.0221)	(0.0222)
N	903	903	903	903
自由度調整済決定係数	0.013	0.010	0.116	0.114

注）線形確率モデルの推定結果。被説明変数は、2022 年 10 月時点で、職場で常にマスクをつけている場合に 1 を取り、それ以外の場合に 0 を取るダミー変数。( )内には頑健な標準誤差を表示。切片の係数の表示は省略。注）主婦／主夫、無職、職場がない方に該当する方は含まれていない。

+ p<0.15、* p<0.10、 ** p<0.05、 *** p<0.01

3. 2 小・中学生のコロナ禍前後でのマスクをつける頻度の変化[10]

3.2.1 はじめに

政府は、2023 年 1 月 21 日現在、学校でのマスク着用について、「身体的距離が十分とれない時はマスクを着用すべき」としている[11]。しかし、政府は、2023 年 1 月 20 日に、新型コロナウイルスの感染症法上の分類について、2023 年春にも「5 類」に移行する方針を示した。これによって、子どもたちの学校でのマスク着用についての今後の方針についても議論が始まっている[12]。

実際に、コロナ禍によって小・中学生はどの程度マスクをつけるようになったのか。本項では、本調査のアンケート調査部分の回答を用いて、小・中学生のコロナ禍前後のマスクをつける頻度の変化について、男女、年齢層、持病の有無別に確認した分析結果を紹介する。 本稿で紹介する分析は、子のマスク着用頻度についての親による回答の分析結果である。結果を先取りしてお伝えすると以下の通りである。

- コロナ禍前と 2022 年 10 月の調査時点を比べると、学校でも外出時にも、小・中学生のマスクをつける頻度は大きく増加した。
- 男子よりも女子の間で、常にマスクをつけている人が、より増加した傾向が見られる。
- 小学校低学年の子の間では、小学校高学年や中学生の子に比べて、2022 年 10 月現在、外出時に、常にマスク子をつける子の割合は小さい傾向が見られるが、常につけている子とほとんどつけている子を合わせた割合は、その他の学年と大きく変わらない。
- 新型コロナ感染症の重症化リスクが高いと言われる持病のある子は、コロナ禍前からマスクをつける頻度が多い傾向が見られるが、コロナ禍のマスク着用頻度への影響の大きさについては、持病の有無による大きな違いは確認されなかった。

---

10 本項で報告する結果は、以下に掲載された結果にもとづく。
岩崎・村松（2023.1.26）「小・中学生のコロナ禍前後でのマスクをつける頻度の変化」基礎研レポート（https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=73729?pno=2&site=nli、2023/1/27 アクセス）

11 文部科学省「学校における新型コロナウイルス感染症対策に関する Q&A（問 3 学校でのマスクの着用が必要ですか。（令和 4 年 9 月 20 日更新）」（https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00020.html#q3、2023 年 1 月 23 日アクセス）

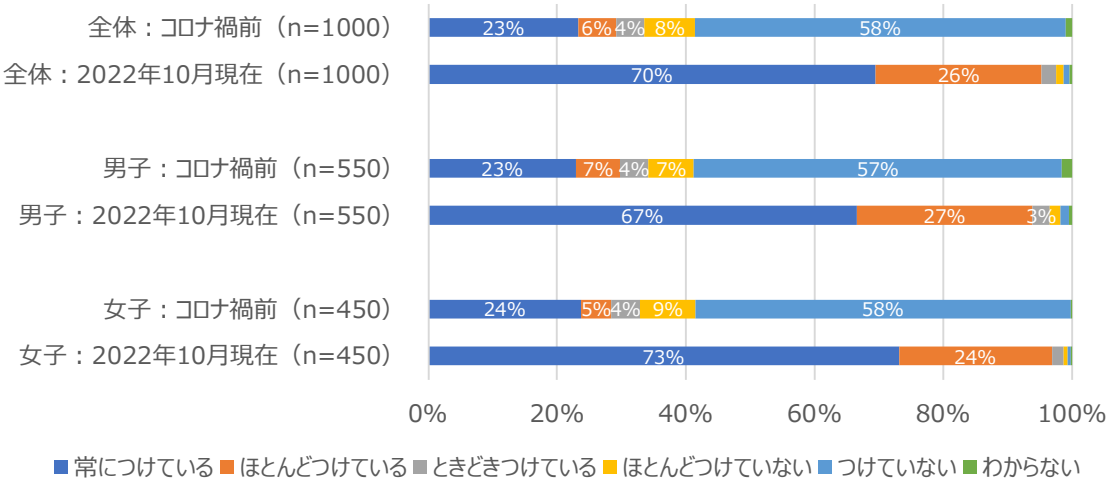
12 毎日新聞（2022 年 1 月 20 日）5 類移行 吉村・大阪知事、学校での一律マスク着用「やめるべきだ」（https://mainichi.jp/articles/20230120/k00/00m/040/215000c、2023 年 1 月 23 日アクセス）

3.2.2　男女別マスクをつける頻度のコロナ禍前後の変化

まず、コロナ禍前後の学校でマスクをつける頻度の変化について、図 3.2.1 に男女別に示した。全体の分布からは、コロナ禍前は、つけていない子が 6 割程度であったが、2022 年 10 月現在ではつけていない子はほとんどおらず、常につけている子の割合は 7 割程度、常につけている子とほとんどつけている子を合わせれば 96%と、コロナ禍で小・中学生のマスクをつける頻度は大幅に増加したことが確認できる。

また、男女を比較すると、コロナ禍前の分布についてはほとんど違いが見られないものの、2022 年 10 月現在では、常につけている子の割合は女子の方が若干大きい傾向が見られる[13]。

図3.2.1 学校でマスクをつける頻度　（男女別）



注）2 パーセント以下は値の表示を省略

次に、コロナ禍前後の外出時のマスクをつける頻度の変化について、図 3.2.2 に男女別に示した[14]。全体の分布からは、コロナ禍前は、つけていない子が 6 割程度であったが、2022 年 10 月現在ではつけていない子はほとんどおらず、常につけている子の割合は 6 割程度、常につけている子とほとんどつけている子を合わせた割合は 92%と、コロナ禍によって、学校のみでなく、外出時にも、小・中学生のマスクをつける頻度は大幅に増加したことが確認できる。

また、男女を比較すると、コロナ禍前の分布についてはほとんど違いが見られないも

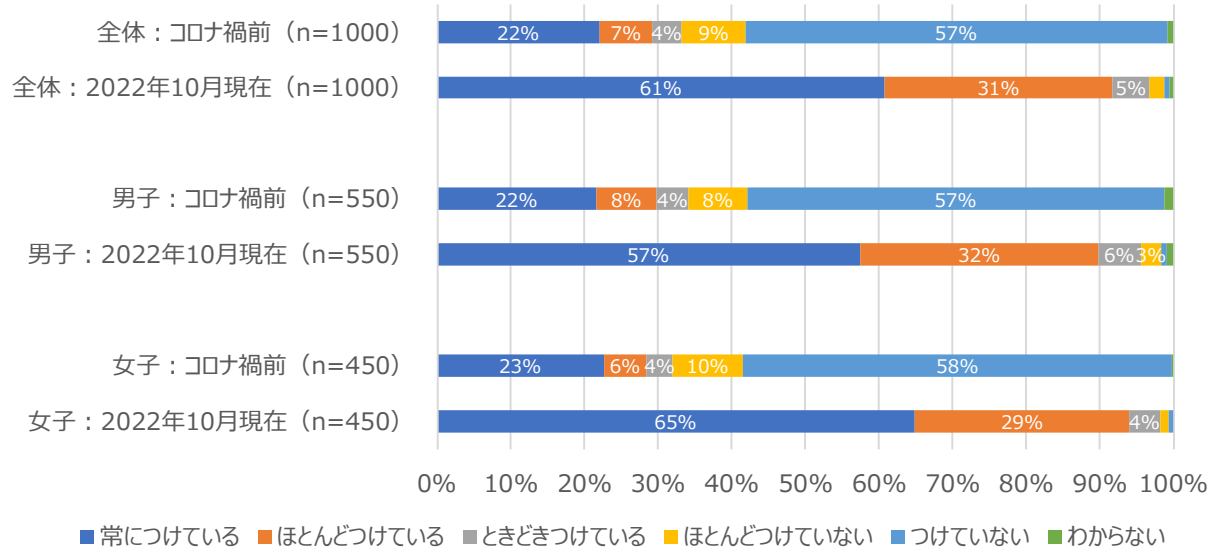
---

[13] 2022 年 10 月現在学校で常にマスクをつけている場合に 1 をとりそれ以外の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数とし、コロナ禍前に学校で常にマスクをつけていた人ダミー、女子ダミー、学年ダミー（小学校低学年、小学校高学年、中学生）、持病有ダミーを説明変数とした線形確率モデルを推定すると、女子ダミーが統計的に有意に正であることが確認された（有意水準 5%）。

[14] 「外出時」については、質問の際、以下のように注記をしている「買い物時や散歩等、目的に応じて異なる場合は、総合的な頻度でお答えください」

のの、学校でのマスク着用の傾向と同様に、2022 年 10 月現在で常につけている子の割合は、男子よりも女子の方がやや大きい傾向が見られる[15]。

図3.2.2 外出時マスクをつける頻度　（男女別）



注) 2 パーセント以下は値の表示を省略

3.2.3 学年別マスクをつける頻度のコロナ禍前後の変化

次に、学校でマスクをつける頻度について、小学校低学年、小学校高学年、中学生に分けて分布を確認したのが、図 3.2.3 である。コロナ禍前から、中学生は小学生に比べて、常にマスクをつけている人の割合がやや大きい傾向が見られる[16]。しかし、コロナ禍後でその差が広がった傾向は見られない。つまり、コロナ禍の学校でのマスク着用頻度への影響の大きさについては、学年による大きな違いは確認されなかった[17]。

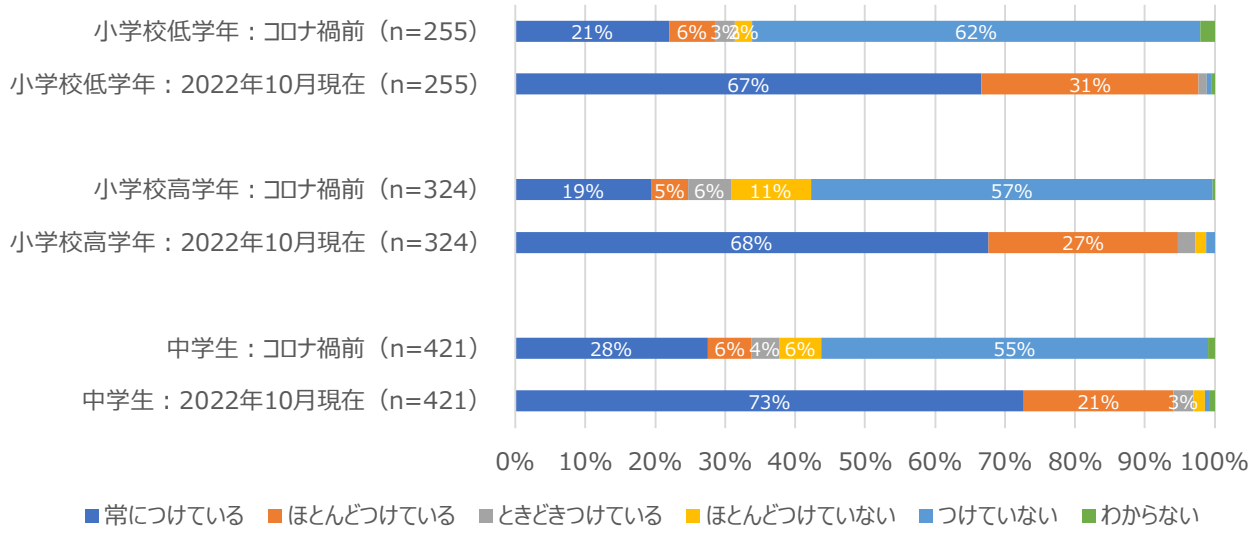
---

[15] 2022 年 10 月現在外出時に常にマスクをつけている場合に 1 をとりそれ以外の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数とし、コロナ禍前に外出時に常にマスクをつけていた人ダミー、女子ダミー、学年ダミー（小学校低学年、小学校高学年、中学生）、持病有ダミーを説明変数とした線形確率モデルを推定すると、女子ダミーが統計的に有意に正であることが確認された（有意水準 5%）。

[16] コロナ禍前に学校で常にマスクをつけていた場合に 1 をとりそれ以外の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数とし、女子ダミー、学年ダミー（小学校低学年、小学校高学年、中学生）、持病有ダミーを説明変数とした線形確率モデルを推定すると、小学校低学年ダミーを参照カテゴリーとした場合、中学生ダミーが統計的に有意に正であることが確認された（有意水準 5%）。

[17] 2022 年 10 月現在学校で常にマスクをつけている場合に 1 をとりそれ以外の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数とし、コロナ禍前に学校で常にマスクをつけていた人ダミー、女子ダミー、学年ダミー（小学校低学年、小学校高学年、中学生）、持病有ダミーを説明変数とした線形確率モデルを推定すると、小学校低学年ダミーを参照カテゴリーにした場合、統計的に

図3.2.3 学校でマスクをつける頻度　（学年別）



注) 2 パーセント以下は値の表示を省略

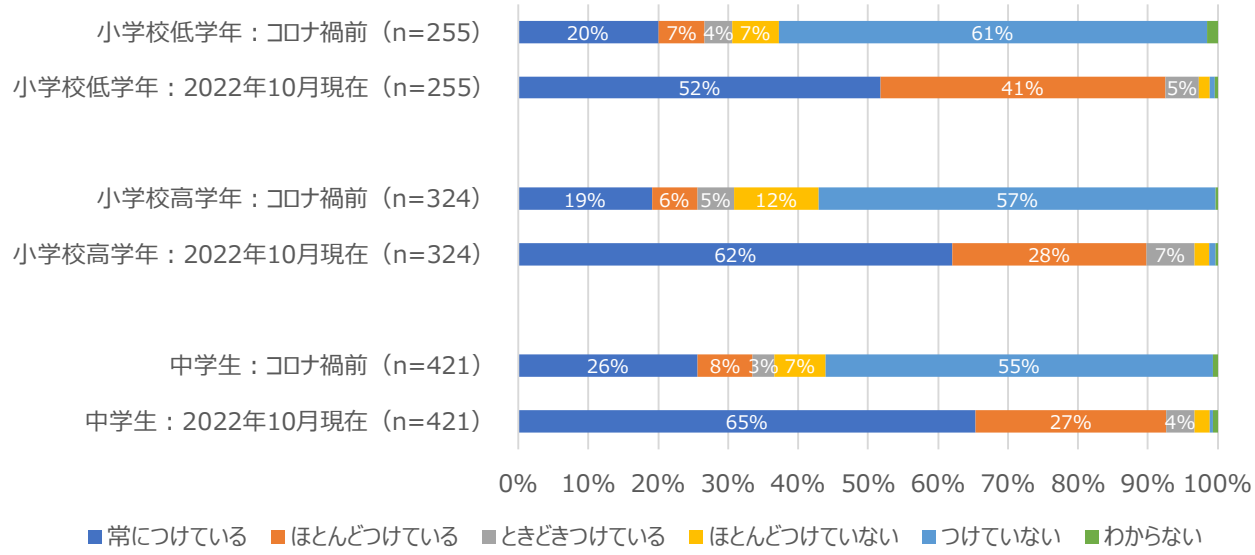
また、外出時にマスクをつける頻度について、小学校低学年、小学校高学年、中学生に分けて分布を確認したのが図 3.2.4 である。コロナ禍前から中学生は常にマスクをつけている人の割合がやや大きい傾向が見られることについては、学校でマスクをつける頻度で見られた傾向と同様である[18]。2022 年 10 月現在のマスクをつける頻度について確認すると、常につけている人の割合は、小学校低学年で、その他の学年に比べて小さい傾向が見られる[19]。一方で、常につけている人とほとんどつけている人を合わせた場合には、その割合は、学年による違いはほとんど見られないようだ。

有意な学年カテゴリーダミーはなかった（有意水準 15%）。

[18] コロナ禍前に学校で常にマスクをつけていた場合に 1 をとりそれ以外の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数とし、女子ダミー、学年ダミー（小学校低学年、小学校高学年、中学生）、持病有ダミーを説明変数とした線形確率モデルを推定すると、小学校低学年ダミーを参照カテゴリーとした場合、小学校低学年ダミーと中学生ダミーが統計的に有意に正であることが確認された（有意水準 10%）。

[19] 2022 年 10 月現在外出時に常にマスクをつけている場合に 1 をとりそれ以外の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数とし、コロナ禍前に外出時に常にマスクをつけていた人ダミー、女子ダミー、学年ダミー（小学校低学年、小学校高学年、中学生）、持病有ダミーを説明変数とした線形確率モデルを推定すると、女子ダミーが統計的に有意に正であることが確認された（有意水準 1%）。

図3.2.4 外出時マスクをつける頻度　（年齢別）



注) 2 パーセント以下は値の表示を省略

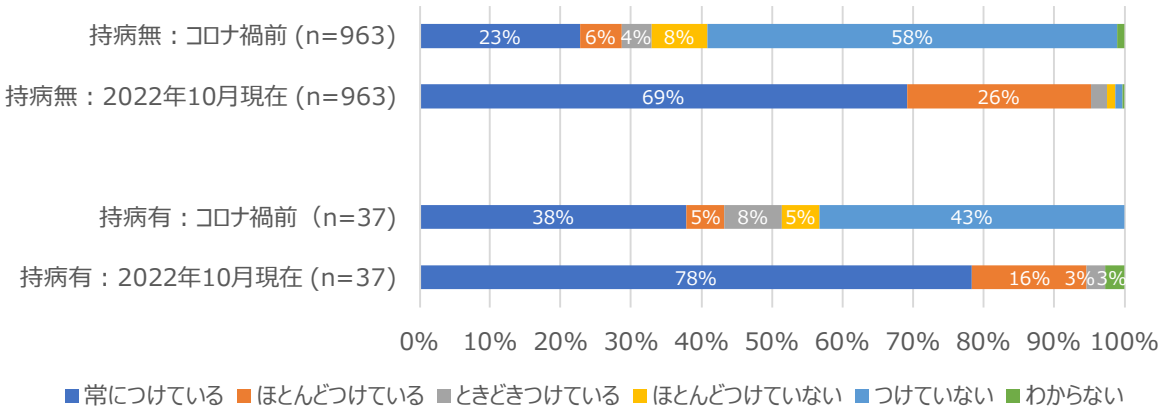
3.2.4 持病の有無別マスクをつける頻度のコロナ禍前後の変化

さらに、新型コロナ感染症の重症化リスクが高いと言われる持病の有無別に、学校でマスクをつける頻度を確認したのが、図 3.2.5 である。持病のある子は、持病の無い子に比べて、コロナ禍前から、マスクをつける頻度が多い傾向が見られる[20]。一方で、2022 年 10 月現在にその差は大きく広がっておらず、コロナ禍の学校でのマスク着用頻度への影響の大きさについては、持病の有無による大きな違いは確認されなかった[21]。

[20] コロナ禍前に学校で常にマスクをつけていた場合に 1 をとりそれ以外の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数とし、女子ダミー、学年ダミー（小学校低学年、小学校高学年、中学生）、持病有ダミーを説明変数とした線形確率モデルを推定すると、持病有ダミー統計的に有意に正であることが確認された（有意水準 5%）。

[21] 2022 年 10 月現在学校で常にマスクをつけている場合に 1 をとりそれ以外の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数とし、コロナ禍前に学校で常にマスクをつけていた人ダミー、女子ダミー、学年ダミー（小学校低学年、小学校高学年、中学生）、持病有ダミーを説明変数とした線形確率モデルを推定すると、持病有ダミーの係数は統計的に有意な値ではなかった（有意水準 15%）。

図3.2.5 学校でマスクをつける頻度　（持病有無別）



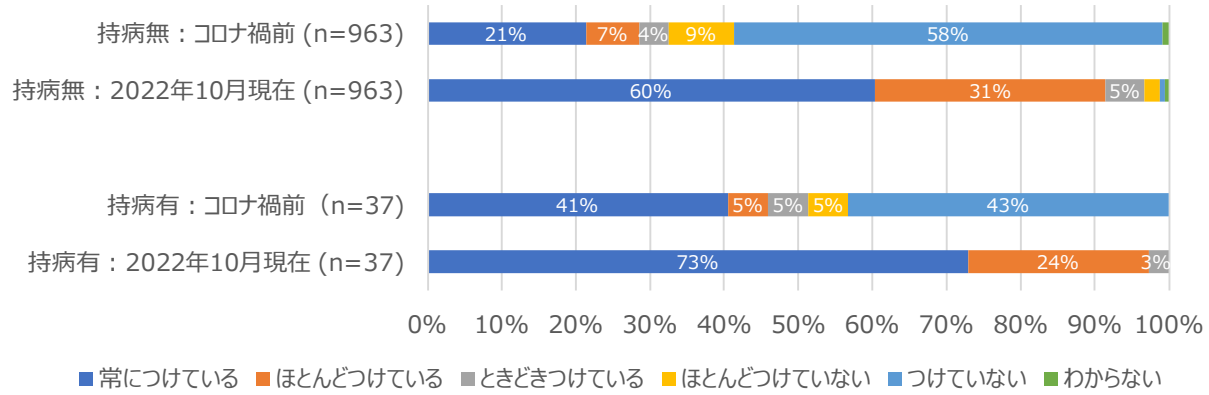
注) 2 パーセント以下は値の表示を省略

また、新型コロナ感染症の重症化リスクが高いと言われる持病の有無別に、外出時にマスクをつける頻度を確認したのが、図 3.2.6 である。学校でマスクをつける頻度と同様に、持病のある子は、持病の無い子に比べて、コロナ禍前から、マスクをつける頻度が多い傾向が見られる[22]。一方で、2022 年 10 月現在にその差の大きさは大きく変化しておらず、コロナ禍の外出先でのマスク着用頻度への影響の大きさについては、持病の有無による大きな違いは確認されなかった[23]。

[22] コロナ禍前に外出時に常にマスクをつけていた場合に 1 をとりそれ以外の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数とし、女子ダミー、学年ダミー（小学校低学年、小学校高学年、中学生）、持病有ダミーを説明変数とした線形確率モデルを推定すると、持病有ダミー統計的に有意に正であることが確認された（有意水準 1%）。

[23] 2022 年 10 月現在外出時に常にマスクをつけている場合に 1 をとりそれ以外の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数とし、コロナ禍前に外出時に常にマスクをつけていた人ダミー、女子ダミー、学年ダミー（小学校低学年、小学校高学年、中学生）、持病有ダミーを説明変数とした線形確率モデルを推定すると、持病有ダミーの係数は、統計的に有意な値ではなかった（有意水準 15%）。

図3.2.6 外出時にマスクをつける頻度　（持病有無別）



注) 2 パーセント以下は値の表示を省略

3.2.5 おわりに

本項では、アンケート調査結果部分を用いて、小・中学生のコロナ禍前後のマスクをつける頻度の変化について、男女、年齢層、持病の有無別に確認した分析結果を紹介した。本項で紹介した主な結果は以下の 4 点である。

- コロナ禍前と 2022 年 10 月の調査時点を比べると、学校でも外出時にも、小・中学生のマスクをつける頻度は大きく増加した。
- 男子よりも女子の間で、常にマスクをつけている人がより増加した傾向が見られる。
- 小学校低学年の子の間では、小学校高学年や中学生の子に比べて、2022 年 10 月現在、外出時に、常にマスク子をつける子の割合は小さい傾向が見られるが、常につけている子とほとんどつけている子を合わせた割合は、その他の学年と大きく変わらない。
- 新型コロナ感染症の重症化リスクが高いと言われる持病のある子は、コロナ禍前からマスクをつける頻度が多い傾向が見られるが、コロナ禍のマスク着用頻度への影響の大きさについては、持病の有無による大きな違いは確認されなかった。

男女や学年の間で見られる違いの理由については今後の検討課題であるが、交流関係から受ける影響や外出先の違いなどが考えられるかもしれない。コロナ禍で大きく変化した子どもたちのマスク着用状況は、アフターコロナの社会でどのように変化していくのか、また、こうした変化が今後長期的に子どもたちの成長にどのような影響を与える可能性があるのか、厳密に検証されていく必要があるだろう。

3. 3 子育て中の人のコロナ禍でのマスク着用/外すことの不快度合の変化[24]

3.3.1 はじめに

コロナ禍でマスクの着用に慣れていく中で、マスクをつけることや外すことの不快度合いはどのように変化してきた可能性があるのだろうか。本項ではアンケート調査回答部分を用いて、新型コロナ感染拡大が始まったころと現在とで、マスクをつけることや、外すことの不快度合いがどのように変化をしたのかを、男女別に検証した結果を紹介する。本稿で紹介する結果は、親のマスクをつけることへの不快度についての親自身による回答の分析結果である。

結果を先取りしてお伝えすれば、男性の間では、感染拡大初期と現在を比べて、マスクをつけることの不快度合いや、マスクを外すことの不快度合いが変化した傾向は見られなかった。一方で、女性の間では、マスクをつけることの不快度合いが減少し、マスクを外すことの不快度合いが高まった傾向が見られた。

3.3.2 男女別マスクをつけることの不快度合いのコロナ禍での変化

まず、コロナ禍でのマスクをつけることの不快度合いの変化について、図 3.3.1 に男女別に示した[25]。男性の間では、2022 年 10 月現在の分布と、その 2 年前(新型コロナ感染拡大が始まった頃)の分布について、マスクをつけることの不快度合いに大きな変化は見られない[26]。一方で、女性の間では、非常に不快に感じている人の割合が減少し、非常に不快に感じている人と少し不快に感じている人を合わせた割合についても、減少した傾向が見られる[27]。つまり、男性の間では大きな変化が見られなかったも

---

24 本項で報告する結果は、以下に掲載された結果にもとづく。
岩崎・村松(2023.1.27)「子育て中の人のコロナ禍でのマスク着用/外すことの不快度合いの変化」基礎研レター(https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=73738?site=nli、2023/1/27 アクセス)

25 2 年前の不快度合いは、2022 年 10 月の調査時点で、2 年前について思い出して回答を頂いたものである。

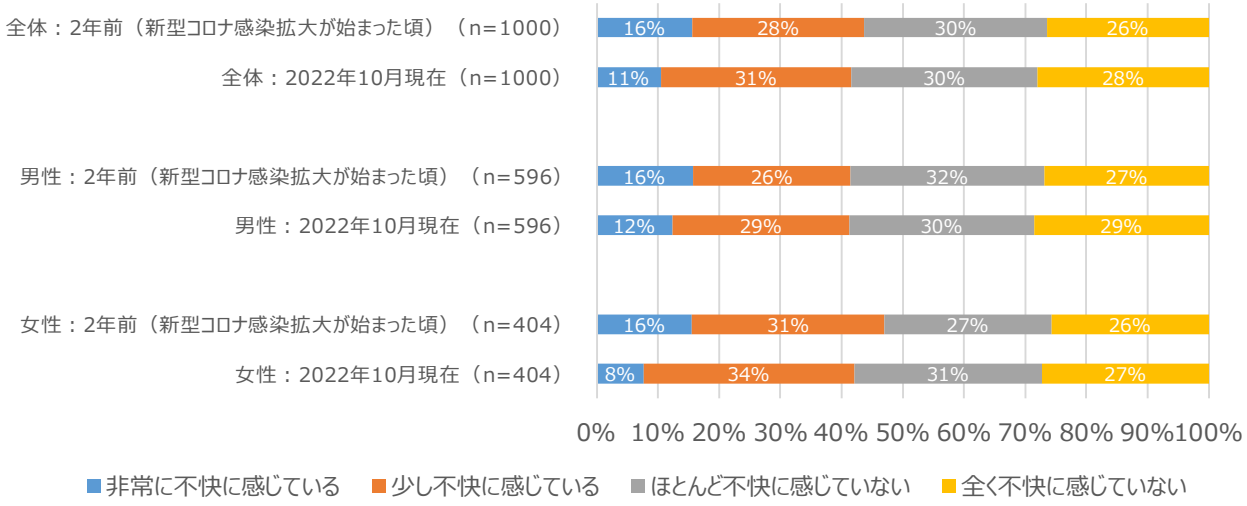
26 マスクをつけることについて、非常に不快に感じているを 4、少し不快に感じているを 3、ほとんど不快に感じていないを 2、全く不快に感じていないを 1 としたマスクをつけることの不快度合い変数を作成し、2022 年 10 月現在と 2 年前を t 検定で比較すると、男性の間では、統計的に有意な違いは見られなかった(有意水準 15%)。

27 マスクをつけることについて、非常に不快に感じているを 4、少し不快に感じているを 3、ほとんど不快に感じていないを 2、全く不快に感じていないを 1 としたマスクをつけることの不快度合い変数を作成し、2022 年 10 月現在と 2 年前を t 検定で比較すると、女性の間では、統計的に有意な違いが見られた(有意水準 5%)。このことから、女性は、コロナ禍でマスクをつけることの不快度が減少した可能性が示唆される。

また、マスクをつけることの不快度合い変数(2022 年 10 月現在)を被説明変数とし、マスクをつけることの不快度合い変数(2 年前)、女性ダミー及び年齢変数を説明変数とした線形回

のの、女性の間では、コロナ禍で、マスクをつけることの不快度合いは減少した傾向が示唆される。

図3.3.1 マスクをつけることを、どの程度不快に感じていますか（男女別）



3.3.3 男女別マスクを外すことの不快度合いのコロナ禍での変化

次に、コロナ禍でのマスクを外すことの不快度合いの変化について、図 3.3.2 に男女別に示した[28]。男性の間では、2022 年 10 月現在の分布と、その 2 年前（新型コロナ感染拡大が始まった頃）の分布について、マスクを外すことの不快度合いに大きな変化は見られない[29]。一方で、女性の間では、少しに不快に感じている人の割合が増加したことによって、非常に不快に感じている人と少し不快に感じている人を合わせた割合についても、増加した傾向が見られる[30]。つまり、男性の間では大きな変化が見られ

帰モデルの推定では、女性ダミーの係数は有意水準 15%で統計的に有意に負であった。このことから、女性は男性に比べて、コロナ禍でマスクをつけることの不快度合いが減少した可能性が示唆される。

[28] 2 年前の不快度合いは、2022 年 10 月の調査時点で、2 年前について思い出して回答を頂いたものである。

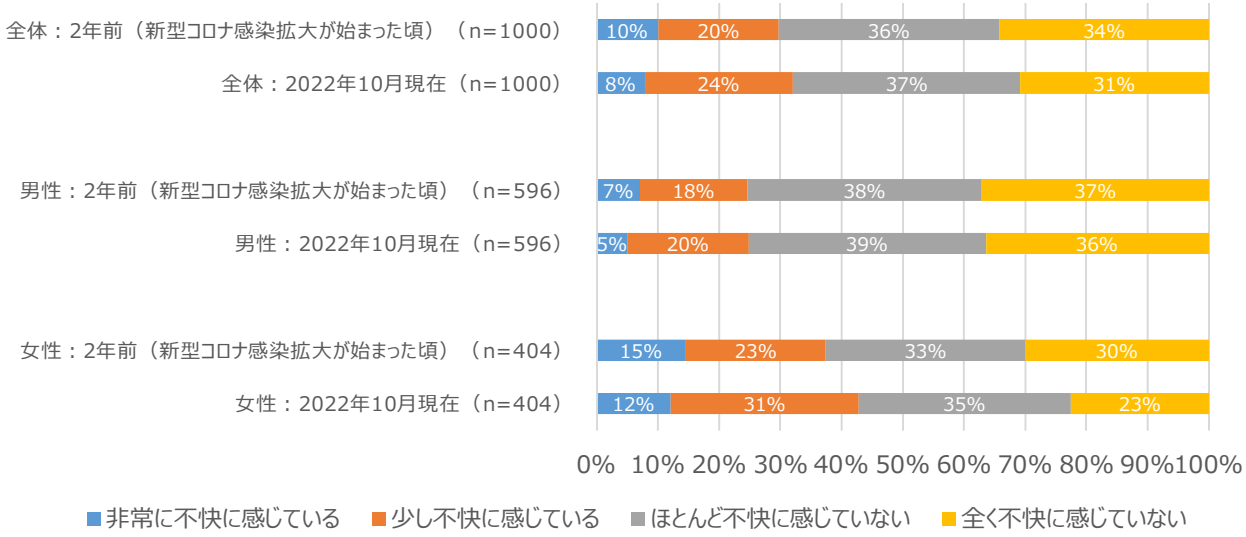
[29] マスクを外すことについて、非常に不快に感じているを 4、少し不快に感じているを 3、ほとんど不快に感じていないを 2、全く不快に感じていないを 1 としたマスクを外すことの不快度合い変数を作成し、2022 年 10 月現在と 2 年前を t 検定で比較すると、男性の間では、統計的に有意な違いは見られなかった（有意水準 15%）。

[30] マスクを外すことについて、非常に不快に感じているを 4、少し不快に感じているを 3、ほとんど不快に感じていないを 2、全く不快に感じていないを 1 としたマスクをつけることの不快度合い変数を作成し、2022 年 10 月現在と 2 年前を t 検定で比較すると、女性の間では、有意水準 15%で統計的に有意な違いが見られた。このことから、女性は、コロナ禍でマスクを外すことの不快度が増加した可能性が示唆される。

また、マスクを外すことの不快度合い変数（2022 年 10 月現在）を被説明変数とし、マスクを外すことの不快度合い変数（2 年前）、女性ダミー及び年齢変数を説明変数とした線形回帰モ

なかったものの、女性の間では、コロナ禍で、マスクを外すことの不快度合いは高まった傾向が示唆される。

図3.3.2 マスクを外すことを、どの程度不快に感じていますか（男女別）



3.3.4 おわりに

本項では本調査のアンケート調査部分を用いて、新型コロナ感染拡大が始まったころと現在とでは、マスクをつけることの不快度合いと、マスクを外すことの不快度合いがどのように変化をしたのかを、確認した結果を紹介した。本調査からは、男性の間では、感染拡大初期と現在で、マスクをつけることの不快度合いや、マスクを外すことの不快度合いが変化した傾向は見られなかった一方で、女性の間では、マスクをつけることの不快度合いが減少し、マスクを外すことの不快度合いが高まった傾向が見られた。

男女で違いが見られる理由については今後の検討課題であるが、新型コロナ感染症の流行によってマスクが外見の魅力度に与える影響が変化したといった報告もあることから[31]、こうした外見への意識が影響している可能性が考えられるかもしれない。新型コロナ感染症の感染法上の分類の「5 類」への移行が検討される中、今後マスクに対する政府の指針も変化していく可能性がある。こうした状況の中で、人々にとって、マスクをつけることや外すことへの感じ方がどう変化していくのか、今後の動向を注視していく必要があるだろう。

デルの推定では、女性ダミーの係数は有意水準 15%で統計的に有意に正であった。このことから、女性は男性に比べて、コロナ禍でマスクを外すことの不快度合いが増加した可能性が示唆される。

[31] 北海道大学(2021/6/28) https://www.hokudai.ac.jp/news/pdf/210628_pr2.pdf(2023 年 1 月 23 日アクセス)

3.4　小・中学生が感じるマスクをつけること/はずすことの「いやさ」[32]

3.4.1 はじめに

コロナ禍では、大人だけでなく子どもたちにとってもマスクの着用は日常的なものになったのではないだろうか。そうした中で、子どもたちは、マスクをつけることやはずすことを、どの程度「いやだ」だと感じているのだろうか。本項では、アンケート調査回答部分を用いて、子ども自身が感じているマスクをつけることやはずすことの「いやさ」の程度及び、親が思う子のマスクを不快に感じている程度の分布を、子の男女、学年別に確認した結果を紹介する。

結果を先取りしてお伝えすると、以下の通りである。

・中学生は、小学生に比べて、マスクをつけることをいやだと感じる人の割合が小さい傾向が見られる。特に中学生女子は、マスクをつけることをいやだと感じる人の割合が小さい傾向が見られる。
・小学校高学年の子や中学生は、小学校低学年の子に比べて、マスクをはずすことをいやだと感じる人の割合が大きい傾向が見られる。
・新型コロナ感染症拡大が始まった時期と現在を比較すると、親は子のマスク着用への不快度合いは小さくなったと感じている傾向が見られる。
・親が感じている子のマスクをつけることやはずすことの不快度合いよりも、子が実際に感じているマスクをつけることやはずすことの不快度合いの方が大きい可能性がある。

3.4.2 小・中学生が感じるマスクをつけることの「いやさ」の度合い

まず、図 3.4.1 に、2022 年 10 月現在、子（小・中学生）の回答者自身がマスクをつけることをいやと感じているかどうかについて、男女別に回答の分布を示した。全体では、子の回答者の約 44%が、「とてもいやだ」もしくは「すこしいやだ」と感じていることがわかる[33]。男女を比較して、大きな違いは見られない[34]。

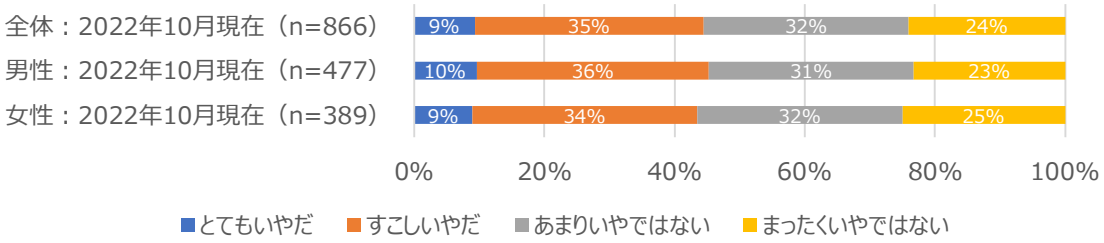
---

32 本項で報告する結果は、以下に掲載された結果にもとづく。
岩崎・村松（2023.1.27）「小・中学生が感じるマスクをつけること/はずすことの「いやさ」」基礎研レポート（https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=73736?site=nli、2023/1/27 アクセス）

33 本項で紹介する結果は、子の回答者 1000 名のうち、子自身がきもちについて回答することに同意し、かつ、「あなたは、マスクをつけることがいやですか」という質問で「答えたくない」を選択していない人 866 名についての分析結果である。

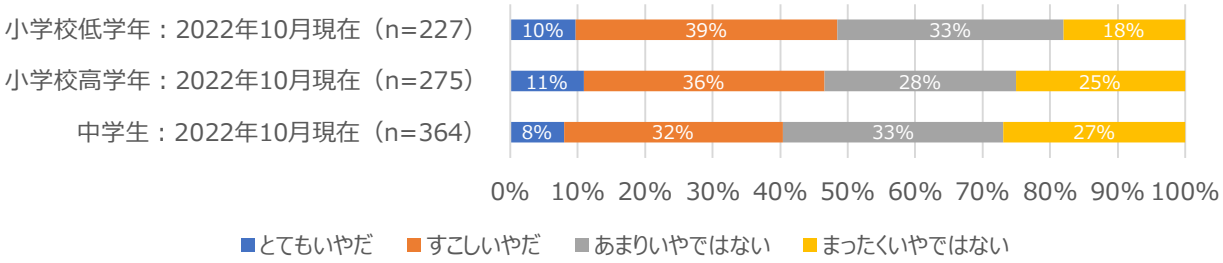
34 マスクをつけることが「とてもいやだ」もしくは「すこしいやだ」と回答した場合に 1 をとるダミー変数を被説明変数とし、女性ダミー及び学年カテゴリー（小学校低学年ダミー、小学校高学年ダミー、中学生ダミー）を説明変数とした線形確率モデルの推定では、女性ダミーの係数は統計的に有意な値ではなかった（有意水準 15%）。

図3.4.1 あなたは、マスクをつけることがいやですか。（男女別）



次に、図 3.4.2 に、マスクをつけることをいやと感じているかどうかについて、学年別に回答の分布を示した。この図からは、小学生に比べて中学生の間で、「とてもいやだ」もしくは「すこしいやだ」と感じている人の割合が小さい傾向が見られる[35]。さらに追加の分析では、中学生の中でも男子に比べて女子は「とてもいやだ」もしくは「すこしいやだ」と感じている人の割合が小さい傾向が見られた[36]。

図3.4.2 あなたは、マスクをつけることがいやですか。（学年別）



3.4.3 小・中学生が感じるマスクをはずすことの「いやさ」の度合い

次に、図 3.4.3 に、2022 年 10 月現在、子（小・中学生）の回答者自身がマスクをはずすことをいやと感じているかどうかについて、男女別に回答の分布を示した。全体では、子の回答者の約 31%が、「とてもいやだ」もしくは「すこしいやだ」と感じていることがわかる[37]。男女を比較して、大きな違いは見られない[38]。

---

[35] 注 34 のモデルの推定では、小学校低学年ダミーを参照カテゴリーとした場合、中学生ダミーの係数は統計的に有意に負であった（有意水準 10%）。

[36] 注 34 のモデルの説明変数に学年カテゴリーダミー×女性ダミーの交差項を追加したモデルの推定では、中学生ダミー×女性ダミーの交差項の係数が統計的に有意に負であった（有意水準 5%）。

[37] 本項で紹介する結果は、子の回答者 1000 名のうち、子自身がきもちについて回答することに同意し、かつ、「あなたは、マスクをつけることがいやですか」という質問で「答えたくない」を選択していない人 862 名についての分析結果である。

[38] マスクをはずすことが「とてもいやだ」もしくは「すこしいやだ」と回答した場合に 1 をとるダミ

図3.4.3 あなたは、マスクをはずすことがいやですか。（男女別）

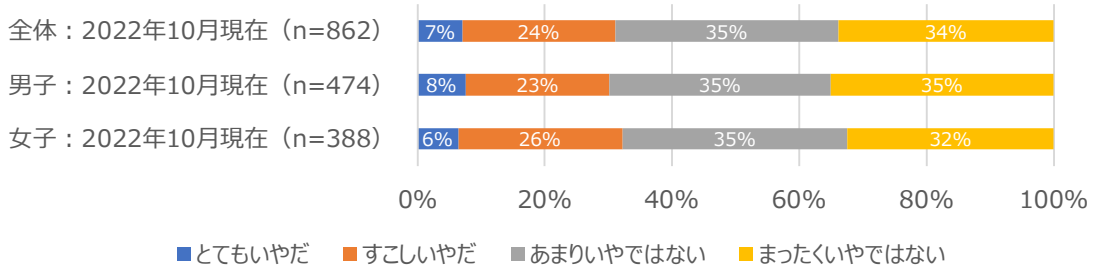
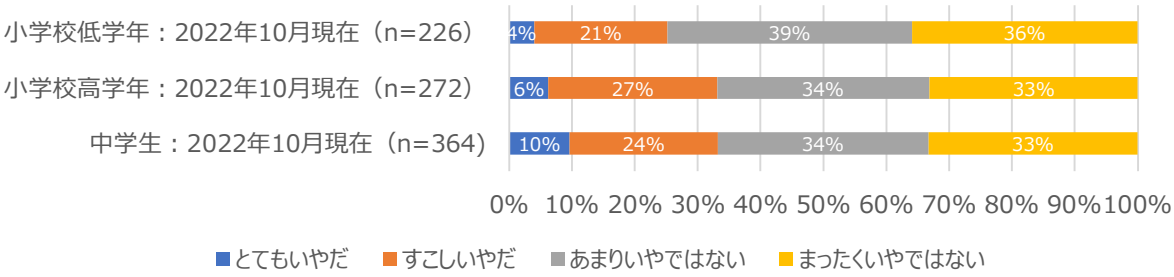


図3.4.4 あなたは、マスクをはずすことがいやですか。（学年別）



さらに、図 3.4.4 に、マスクをはずすことをいやと感じているかどうかについて、学年別に回答の分布を示した。この図からは、小学校低学年の子に比べて小学校高学年の子や中学生の間で、「とてもいやだ」もしくは「すこしいやだ」と感じている人の割合が大きい傾向が見られる[39]。

3.4.4 親が感じる小・中学生の子がマスクをつけることの不快度合い

次に、親の回答者に、2022 年 10 月現在とその 2 年前（新型コロナ感染拡大が始まった頃）それぞれで、子（小・中学生）がどの程度マスクをつけることを不快に感じていると思うかを尋ねた結果を、男子の親と女子の親別に、図 3.4.5 に示した[40]。図 3.4.1 に示した、子自身が感じるマスクをつけることの「いやさ」の程度の分布と比較をすると、

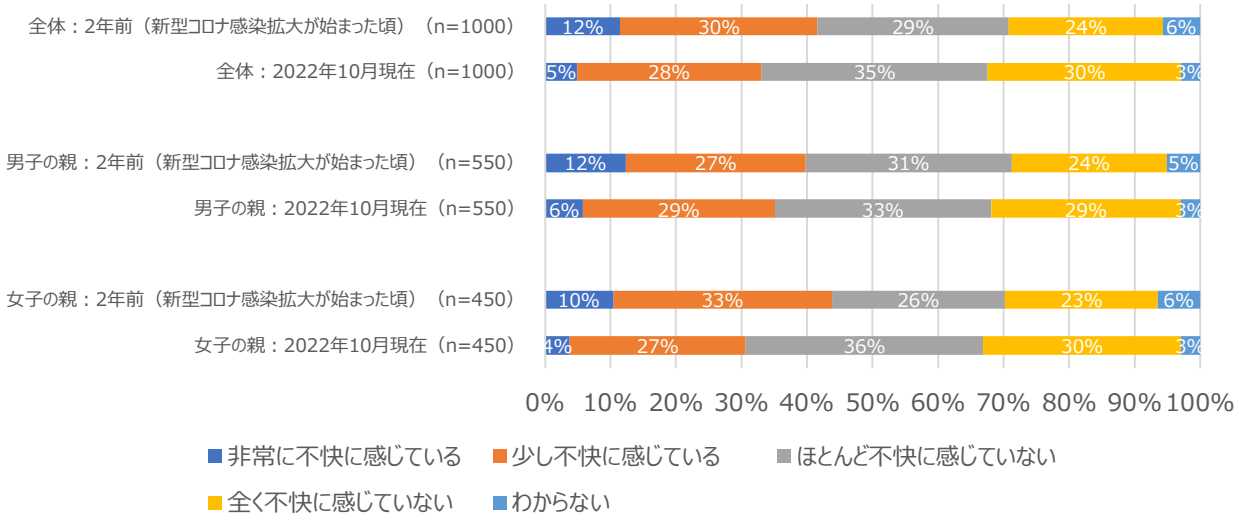
一変数を被説明変数とし、女性ダミー及び学年カテゴリー（小学校低学年ダミー、小学校高学年ダミー、中学生ダミー）を説明変数とした線形確率モデルの推定では、女性ダミーの係数は統計的に有意な値ではなかった（有意水準 15%）。

[39] 注 38 のモデルの推定では、小学校低学年ダミーを参照カテゴリーとした場合、小学校高学年ダミーの係数は有意水準 10%、中学生ダミーの係数は有意水準 5%で統計的に有意に正であった。

[40] 2 年前の不快度合いは、2022 年 10 月の調査時点で、2 年前について思い出して回答を頂いたものである。

2022 年 10 月現在で、子の回答者の約 31%が、マスクをつけることを「とてもいやだ」もしくは「すこしいやだ」と感じている一方、親の回答者で子がマスクをつけることを「非常に不快に感じている」もしくは「不快に感じている」と思うと答えた人の割合は、2022 年 10 月現在で、全体の約 33%となっている。このことから、親が感じるよりも、子自身はマスクをつけることを「いやだ」と感じている可能性が示唆される[41]。

図3.4.5 お子さんはマスクをつけることを、どの程度不快に感じていると思いますか（男女別）



また、図 3.4.5 からは、男子の親であっても女子の親であっても、子がマスクをつけることを不快と感じていると思う人の割合は過去 2 年間で減少した傾向が見られる[42]。男子の親と女子の親を比べると、特に女子の親の場合に、子がマスクをつけることを不快に感じていると思う人の割合が大きく減少している傾向が見られる[43]。

---

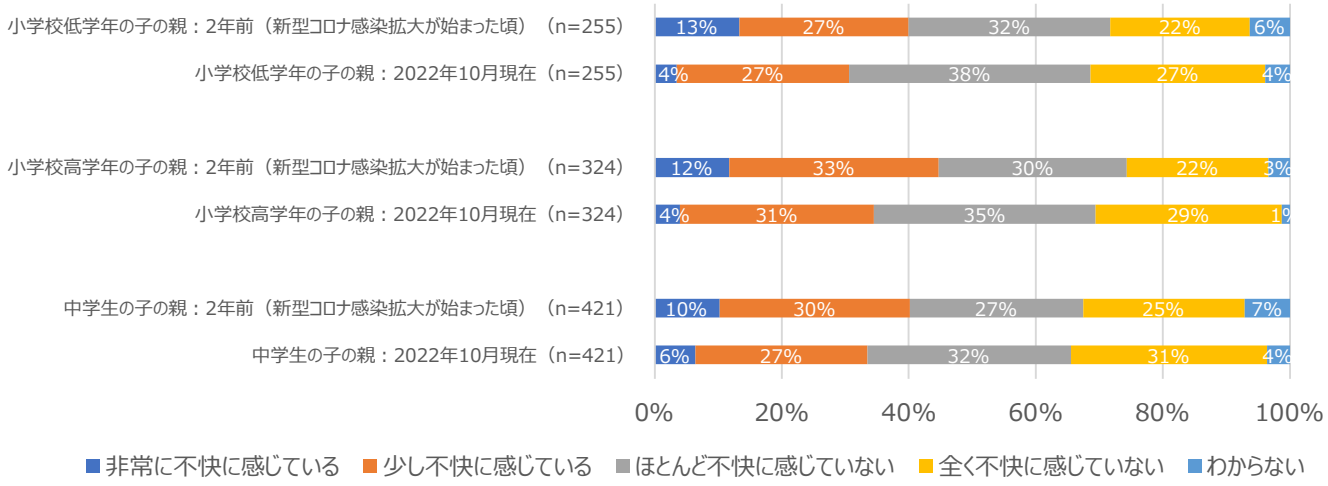
41 子自身がマスクをつけることを「とてもいやだ」もしくは「すこしいやだ」と感じる場合に1をとるダミー変数と、親が子がマスクをつけることを「非常に不快に感じている」もしくは「少し不快に感じている」と回答した場合に1をとるダミー変数の差について t 検定を行うと、統計的に有意な差が確認された（有意水準 1%）

42 マスクをつけることについて、非常に不快に感じているを 4、少し不快に感じているを 3、ほとんど不快に感じていないを 2、全く不快に感じていないを 1 としたマスクをつけることの不快度合い変数を作成し（わからないはサンプルから除いて推定）、2022 年 10 月現在と 2 年前を t 検定で比較すると、男子の間でも女子の間でも、統計的に有意な違いが見られた（有意水準 1%）。

43 マスクをつけることについて、非常に不快に感じているを 4、少し不快に感じているを 3、ほとんど不快に感じていないを 2、全く不快に感じていないを 1 としたマスクをつけることの不快度合い変数を作成し（わからないはサンプルから除いて推定）、2022 年 10 月現在の値を被説明変数、2 年前の不快度合い変数、女子ダミー、学年ダミー（小学校低学年ダミー、小学校高

次に、親の回答者に、2022 年 10 月現在とその 2 年前それぞれで、子がどの程度マスクをつけることを不快に感じていると思うかを尋ねた結果を、子の学年別に、図 3.4.6 に示した。図 3.4.6 からは、子の学年に関わらず、子がマスクをつけることを不快と感じていると思う人の割合は 2 年間で減少した傾向が見られる[44]。また、中学生の親は、その他の学年の親に比べて、子がマスクをつけることを不快に感じていると思う人の割合の減少幅が小さい傾向が見られた[45]。

図3.4.6 お子さんはマスクをつけることを、どの程度不快に感じていると思いますか（学年別）



3.4.5 親が感じる小・中学生の子がマスクをはずすことの不快度合い

次に、親の回答者に、2022 年 10 月現在とその 2 年前（新型コロナ感染拡大が始まった頃）それぞれで、子（小・中学生）がどの程度マスクをはずすことを不快に感じていると思うかを尋ねた結果を、男子の親と女子の親別に、図 3.4.7 に示した。図 3.4.3 に示した、子自身が感じるマスクをはずすことの「いやさ」の程度の分布と比較をすると、2022 年 10 月現在で、子の回答者の約 31%が、マスクをはずすことを「とてもいやだ」もしくは「すこしいやだ」と感じている一方、親の回答者で子がマスクをはずすことを「非

学年ダミー、中学生ダミー）を説明変数とした線形回帰モデルを推定すると、女子ダミーが統計的に有意に負であった（有意水準 5%）。

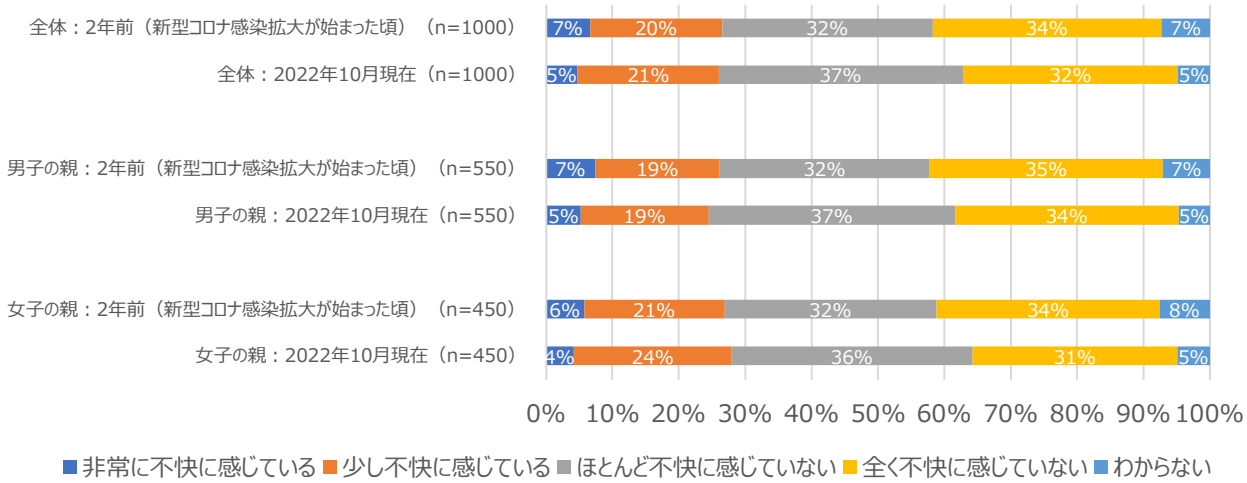
[44] マスクをつけることについて、非常に不快に感じているを 4、少し不快に感じているを 3、ほとんど不快に感じていないを 2、全く不快に感じていないを 1 としたマスクをつけることの不快度合い変数を作成し（わからないはサンプルから除いて推定）、2022 年 10 月現在と 2 年前を t 検定で比較すると、小学校低学年、小学校高学年、中学生のいずれの学年の間でも、統計的に有意な違いが見られた（有意水準 1%）。

[45]注 43 の推定では、推定すると、小学校低学年ダミーを参照カテゴリーとした場合、中学生ダミーが統計的に有意に正であった（有意水準 10%）。

常に不快に感じている」もしくは「不快に感じている」と思うと答えた人の割合は、2022 年 10 月現在で、全体の約 26%となっている。このことから、親が感じるよりも、子自身はマスクをはずすことを「いやだ」と感じている可能性が示唆される[46]。

また、図 3.4.7 からは、男子の親であっても女子の親であっても、子がマスクをつけることを不快と感じていると思う人の割合は 2 年間でほとんど変化していない傾向が見られる[47]。

図3.4.7 お子さんはマスクを外すことを、どの程度不快に感じていると思いますか（男女別）



さらに、親の回答者に、2022 年 10 月現在とその 2 年前それぞれで、子がどの程度マスクをはずすことを不快に感じていると思うか尋ねた結果を、子の学年別に、図 3.4.8 に示した。図 3.4.8 からは、小学校高学年や中学生の子の親は、小学校低学年の親と比べて、子がマスクをはずすことを「非常に不快に感じている」もしくは「少し不快に感じている」と回答した人の割合が大きいことが確認できる[48]。これは、図 3.4.4 で

---

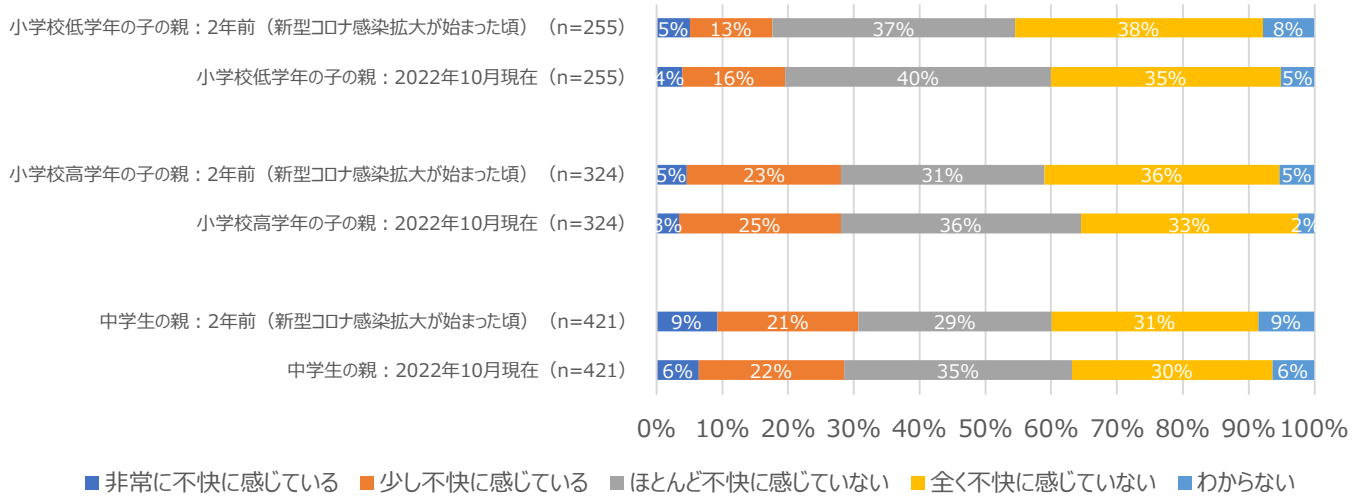
[46] 子自身がマスクをはずすことを「とてもいやだ」もしくは「すこしいやだ」と感じる場合に1をとるダミー変数と親が子がマスクをはずすことを「非常に不快に感じている」もしくは「少し不快に感じている」と回答した場合に1をとるダミー変数の差について t 検定を行うと、統計的に有意な差が確認された（有意水準 1%）

[47] マスクをつけることについて、非常に不快に感じているを 4、少し不快に感じているを 3、ほとんど不快に感じていないを 2、全く不快に感じていないを 1 としたマスクをつけることの不快度合い変数を作成し（わからないはサンプルから除いて推定）、2022 年 10 月現在と 2 年前を t 検定で比較すると、男子の間でも女子の間でも、統計的に有意な違いは見られなかった（有意水準 15%）。

[48] マスクをつけることについて、非常に不快に感じているを 4、少し不快に感じているを 3、ほとんど不快に感じていないを 2、全く不快に感じていないを 1 としたマスクをつけることの不快度合い変数を作成し（わからないはサンプルから除いて推定）、2022 年 10 月現在の値を被説明変数、女子ダミー、学年ダミー（小学校低学年ダミー、小学校高学年ダミー、中学生ダミー）

見られた、子自身の回答と一貫した傾向である。また、子の学年に関わらず、子がマスクをつけることを不快と感じていると思う人の割合は過去 2 年間でほとんど変化が見られないことが分かる[49]。

図3.4.8. お子さんはマスクをはずすことを、どの程度不快に感じていると思いますか（学年別）



3.4.6 おわりに

本項では、アンケート調査回答部分を用いて、子ども自身が感じているマスクをつけることやはずことの「いやさ」の程度及び、親が思う子のマスクを不快に感じている程度の分布を、子の男女、学年別に確認した結果を紹介した。本項で示された主な結果は以下の通りである。

・中学生は、小学生に比べて、マスクを<u>つけること</u>をいやだと感じる人の割合が小さい傾向が見られる。特に中学生女子は、マスクをつけることをいやだと感じる人の割合が小さい傾向が見られる。
・小学校高学年の子や中学生は、小学校低学年の子に比べて、マスクを<u>はずすこと</u>を

を説明変数とした線形回帰モデルを推定すると、小学校低学年ダミーを参照カテゴリーとした場合、中学生ダミーの係数は統計的に有意に正（有意水準 5%）、小学校高学年ダミーの係数は正だが統計的に有意ではなかった（p 値 0.152）。

[49] マスクをつけることについて、非常に不快に感じているを 4、少し不快に感じているを 3、ほとんど不快に感じていないを 2、全く不快に感じていないを 1 としたマスクをつけることの不快度合い変数を作成し（わからないはサンプルから除いて推定）、2022 年 10 月現在と 2 年前を t 検定で比較すると、小学校低学年、小学校高学年、中学生のいずれの学年の間でも、統計的に有意な違いが見られなかった（有意水準 15%）。

いやだと感じる人の割合が大きい傾向が見られる。
・新型コロナ感染症拡大が始まった時期と現在を比較すると、親は子のマスク着用への不快度合いは小さくなったと感じている傾向が見られる。
・親が感じている子のマスクをつけることやはずすことの不快度合いよりも、子が実際に感じているマスクをつけることやはずすことへの不快度合いの方が大きい可能性がある。

男女や学年の間で見られる違いの理由については、今後の検討課題であるが、成長段階の違いや、新型コロナ感染症の流行によってマスクが外見の魅力度に与える影響が変化したといった報告もあることから[50]、こうした外見への意識が影響している可能性が考えられるかもしれない。政府は、2023 年 1 月 21 日現在、学校でのマスク着用について、「身体的距離が十分とれない時はマスクを着用すべき」としている[51]。しかし、政府は、2023 年 1 月 20 日に、現在新型コロナウイルスの感染症法上の分類について、2023 年春にも「5 類」に移行する方針を示した。これによって、子どもたちの学校でのマスク着用についての今後の方針についても議論が始まっている[52]。マスクをつけることやはずすことについて、親が感じる以上に「いやだ」と感じている可能性がある子どもたちにとって、どのような影響があるのか、そして、どのような形での指針の発信が適切なのか、慎重に検証、議論していく必要があるだろう。

[50] 北海道大学(2021/6/28)https://www.hokudai.ac.jp/news/pdf/210628_pr2.pdf(2023 年 1 月 23 日アクセス)
[51] 文部科学省「学校における新型コロナウイルス感染症対策に関する Q&A(問 3　学校でのマスクの着用が必要ですか。(令和 4 年 9 月 20 日更新)」(https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00020.html#q3、2023 年 1 月 23 日アクセス)
[52] 毎日新聞(2022 年 1 月 20 日)5 類移行　吉村・大阪知事、学校での一律マスク着用「やめるべきだ」(https://mainichi.jp/articles/20230120/k00/00m/040/215000c、2023 年 1 月 23 日アクセス)

3.5 子育て中の親は、マスク着用をどう感じているか？[53]

3.5.1 はじめに

マスク着用について、国は、屋外では原則不要、屋内でも距離が確保でき会話をほとんど行わない場合は不要との見方を、2022 年 5 月に示し、場面に応じた適切な着脱を促している。さらに、春には、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の分類を季節性インフルエンザと同じ「5 類」に移行し、屋内でのマスク着用を不要とする方針だ[54]。マスクの着脱についての議論は活発になっているが、脱マスクは浸透しないまま、第 8 波真っ最中となっている[55]。そうした中、本項では、本調査のアンケート部分の回答を用いて、大人（親）がマスクについてどう感じているか紹介する。

3.5.2 マスクについて感じていること

(1) 全体 ～半数以上が「暑い、息苦しいからつけたくない」

まず、マスクをつけることについて感じていることとして、つけたくない理由とつけたい理由を提示して、あてはまる意見をすべて選んでもらった。結果を、マスクをつけたくない理由とつけたい理由に分けて図 3.5.1 に示す。なお、この質問はマスクをつけることについて感じていることを尋ねているだけで、実際につけているかどうかの質問ではない。

つけたくない理由として、もっとも高かったのは、「暑い、息苦しいからつけたくない」で全体の 56.6%を占めた。つけたい理由としては、「感染予防（自分がかからないため）のためにつけたい」が 39.2%、「感染予防（他人に移さないため）のためにつけたい」が 33.5%と 3 割を超えていた。

まだ暑さが残る 10 月だったこともあり、マスクによる感染予防効果に期待している人でも暑さや息苦しさを感じていたと思われる。「みんなはずしているからつけたくない」「はずすとまわりのひとにいやがられるからつけたい」「職場・地域のルールだからつけたい」「みんなつけているからつけたい」など、他人の目や行動を理由としてあげている人は 33.8%（図表略）いた。厚生労働省から屋外ではマスク不要との方針が示されてはいたが、建物内や職場、公共施設や公共の乗り物ではマスク着用が呼びかけられていることが多く、周囲の様子をうかがいながら着脱を判断している人も多いだろう。

---

53 本項で報告する結果は、以下に掲載された結果にもとづく。
村松・岩﨑（2023.1.31 発表予定）「子育て中の親は、マスク着用をどう感じているか？」基礎研レポート

54 2023 年 1 月 19 日 日本経済新聞「コロナ「5 類」今春移行へ、20 日に閣僚協議 政府」等

55 2022 年 10 月 16 日 日本経済新聞「ノーマスクの日いつ 同時流行懸念、機会逸した政府」等

図 3.5.1 大人がマスクについて感じていること（全体）n=1000

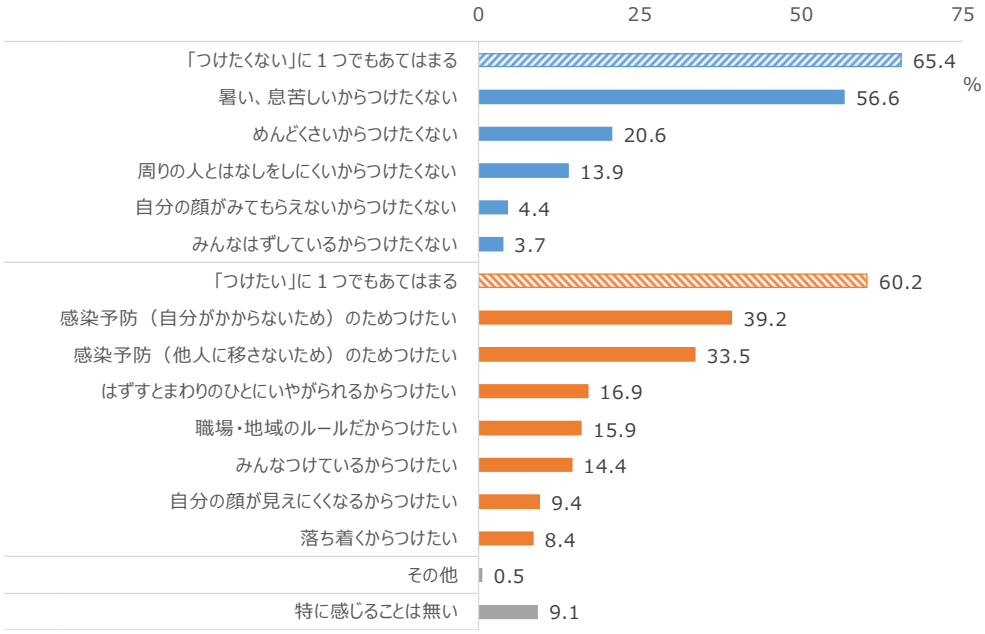
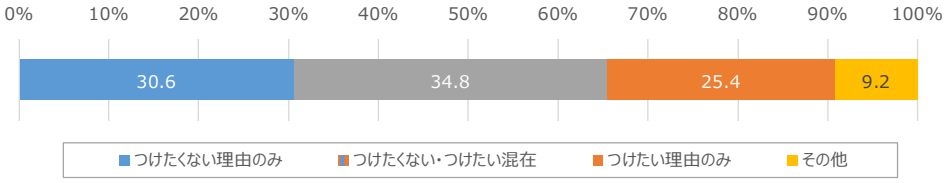


図 3.5.2 に示すように、回答パターンをみると、つけたくない理由のみ選択した人は 30.6%、つけたい理由とつけたくない理由が混在している人が 34.8%、つけたい理由のみ選択した人は 25.4%で、人々のマスクについての感じ方の意見は割れている。つけたくない理由のいずれか1つでもあてはまる人は全体の 65.4%、つけたい理由のいずれか1つでもあてはまる人は全体の 60.2%だった。

図 3.5.2 回答パターン（n=1000）



(2) 男女・年齢層別 ～女性の方が「つけたい」と回答。「自分の顔が見えにくくなるからつけたい」も女性に多い。

次に、マスクについて感じていることを男女・年齢層別に示したものが表 3.5.1 である。性別にみると、男性は「自分の顔がみてもらえないからつけたくない」「みんなはずしているからつけたくない」「特に感じることは無い」が高く、女性は「感染予防（自分がかからないため）のためつけたい」「感染予防（他人に移さないため）のためつけたい」「自分の顔が見えにくくなるからつけたい」「落ち着くからつけたい」「みんなつけているからつけたい」が、それぞれ全体と比べて高い。

また、男性は、「自分の顔がみてもらえないからつけたくない」と「自分の顔が見えにくくなるからつけたい」が同程度であるのに対し、女性は「自分の顔が見えにくくなるからつけたい」が「自分の顔がみてもらえないからつけたくない」を 10 ポイント以上上回る。

年齢別にみると、39 歳以下は「自分の顔がみてもらえないからつけたくない」「みんなはずしているからつけたくない」「落ち着くからつけたい」が、50 歳以上は「暑い、息苦しいからつけたくない」「職場・地域のルールだからつけたい」が、それぞれ全体と比べて高い。

表 3.5.1 大人がマスクについて感じていること（男女・年齢層別）

	n	「つけたくない」に1つでもあてはまる	暑い、息苦しいからつけたくない	周りの人とはなしをしにくいからつけたくない	めんどくさいからつけたくない	自分の顔がみてもらえないからつけたくない	みんなはずしているからつけたくない	「つけたい」に1つでもあてはまる	感染予防（自分がかからないため）のためつけたい	感染予防（他人に移さないため）のためつけたい	自分の顔が見えにくくなるからつけたい	落ち着くからつけたい	みんなつけているからつけたい	職場・地域のルールだからつけたい	はずすとまわりのひとにいやがられるからつけたい	その他	特に感じることは無い	
全体	1,000	65.4	56.6	13.9	20.6	4.4	3.7	60.2	39.2	33.5	9.4	8.4	14.4	15.9	16.9	0.5	9.1	%
男性	596	68.3+	57.4	13.4	22.3	5.5+	4.7+	52.3−	31.9−	27.5−	5.2−	5.9−	10.9−	15.9	15.9	0.5	12.2+	
女性	404	61.1−	55.4	14.6	18.1	2.7−	2.2−	71.8+	50.0+	42.3+	15.6+	12.1+	19.6+	15.8	18.3	0.5	4.5−	
39歳以下	221	66.5	50.2−	15.8	20.4	7.2+	5.9+	61.5	33.9	29.9	11.8	12.2+	13.1	10.0−	13.1	0.9	9.0	
40～44歳以下	256	64.8	56.6	12.1	21.5	3.9	4.3	61.3	43.0	35.2	9.8	6.6	16.4	16.4	17.6	0.0	8.2	
45～49歳以下	293	61.4	54.6	11.9	19.5	3.1	3.4	60.4	40.6	33.4	9.6	9.6	14.0	15.7	18.4	0.7	11.6	
50歳以上	230	70.0	65.2+	16.5	21.3	3.9	1.3−	57.4	38.3	35.2	6.5	5.2−	13.9	21.3+	17.8	0.4	7.0	

（注）全体と比べて有意差がある数値に±（5%有意水準）

(3) コロナ感染不安・コロナ禍前のマスク着用状況　～コロナ感染を心配している人で「つけたい」

続いて、自分のコロナ感染を心配しているか、コロナ禍前の外出時にマスクを着用していたか別に、マスクについて感じていることを示したものが表 3.5.2 である。自分のコロナ感染を心配している人は全体の 68.3%だった。コロナ禍前にもマスクをつけていた（ときどき／ほとんど／常に）のは、全体の 39.1%だった。

自分のコロナ感染を心配しているかどうかでみると、「つけたくない」に1つでもあてはまる人の割合は、心配している人でも、心配していない人と大きな差はなかった。「つけたい」については、コロナ感染を心配している人では、「感染予防（自分がかからないため）のためつけたい」「感染予防（他人に移さないため）のためつけたい」「自分の顔が見えにくくなるからつけたい」「落ち着くからつけたい」「みんなつけているからつけたい」「職場・地域のルールだからつけたい」「はずすとまわりのひとにいやがられるからつけたい」が全体と比べて高く、心配していない人を上回る項目が多い。

また、コロナ禍前の外出時にマスクをつけていたかどうかでみると、コロナ禍前にもつけていた人では「つけたくない」に1つでもあてはまる割合が低く、マスクへの抵抗感

が低いと考えられる。また、コロナ禍前にもつけていた人では、「感染予防（自分がかからないため）のためつけたい」が低い一方で「はずすとまわりのひとにいやがられるからつけたい」「特に感じることは無い」が高く、「つけたくない」に1つでもあてはまる割合も低いが、コロナ感染予防については、あまり意識していないようだ。

表 3.5.2 大人がマスクについて感じていること（感染への心配有無・コロナ禍前のマスク着用有無別）

		n	「つけたくない」に1つでもあてはまる	暑い、息苦しいからつけたくない	周りの人とはなしをしにくいからつけたくない	めんどくさいからつけたくない	みんなはずしているからつけたくない	自分の顔がみてもらえないからつけたくない	「つけたい」に1つでもあてはまる	感染予防（自分がかからないため）のため	感染予防（他人に移さないため）のため	自分の顔が見えにくくなるからつけたい	落ち着くからつけたい	みんなつけているからつけたい	職場・地域のルールだからつけたい	はずすとまわりのひとにいやがられるからつけたい	その他	特に感じることは無い
全体		1,000	65.4	56.6	20.6	13.9	4.4	3.7	60.2	39.2	33.5	16.9	15.9	14.4	9.4	8.4	0.5	9.1 %
自分のコロナ感染	心配している	683	63.8	55.8	19.0	13.8	4.0	3.5	69.4+	49.3+	41.6+	19.0+	18.4+	17.1+	12.2+	9.7+	0.4	5.9−
	心配していない	317	68.8	58.4	24.0	14.2	5.4	4.1	40.4−	17.4−	16.1−	12.3−	10.4−	8.5−	3.5−	5.7−	0.6	16.1+
コロナ禍前のマスク	つけていた	391	55.5−	43.5−	15.9−	12.3	4.9	5.6+	58.8	35.3−	29.9	14.8	14.1	14.3	10.7	12.0+	0.5	13.3+
	つけていなかった	609	71.8+	65.0+	23.6+	14.9	4.1	2.5−	61.1	41.7+	35.8	18.2	17.1	14.4	8.5	6.1−	0.5	6.4−

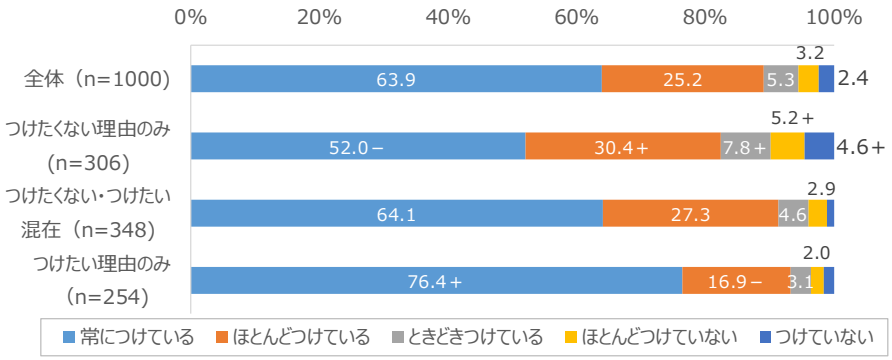
（注 1）回答者自身のコロナ感染について、「非常に心配」「少し心配」を「心配している」、「あまり心配していない」「まったく心配していない」を「心配していない」とした。コロナ禍前のマスク着用について、「常につけていた」「ほとんどつけていた」「ときどきつけていた」を「つけていた」、「ほとんどつけていない」「つけていない」を「つけていなかった」とした。

（注 2）全体と比べて有意差がある数値に±（5%有意水準）

(4)「つけたくない」理由のみ回答した人でも、8割以上が外出時にほとんど以上の頻度でマスクを着用し、半数が「マスクをしていない人に近づくのは、抵抗がある」と回答

マスクをつけることについて感じていることについて、「つけたくない」理由と「つけたい」理由を示したが、実際にマスクをつける頻度はどの程度違うのだろうか。外出時にマスクをつける頻度を比較した（図 3.5.3）。その結果、全体では 63.9%が「常につけている」、25.2%が「ほとんどつけている」だった。ほとんど以上の頻度でつけている人は、これらを合わせて 89.1%にのぼる。つけたい理由のみを回答した人では、それぞれ 76.4%、16.9%で、合計 93.3%がほとんど以上の頻度でつけていた。一方、つけたくない理由のみを回答した人では、それぞれ 52.0%、30.4%で、ほとんど以上の頻度でつけている人は 82.4%だった。つけたくない理由しかない人でも 5 割以上が「常につけている」で、計 8 割以上がほとんど以上の頻度でつけていることから、つけたい理由をもつ人と比べて低いものの、かなりの高頻度と言えるだろう。

図 3.5.3 外出時にマスクをつける頻度



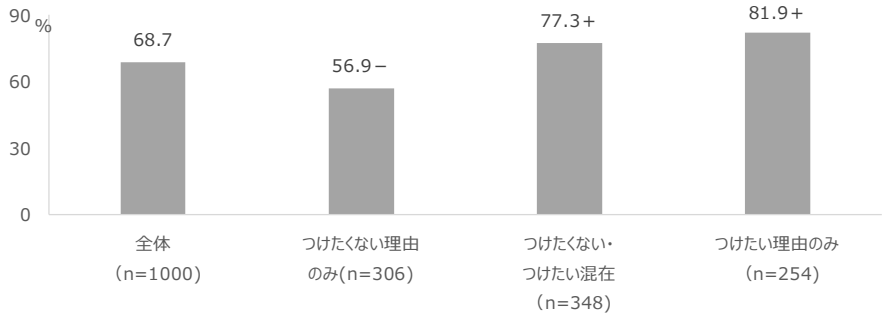
（注 1）全体と比べて有意差がある数値に±（5%有意水準）

（注 2）2.0%未満は数値の表記を省略

マスクをつけることについて感じていることについて、「つけたくない」理由と「つけたい」理由を示したが、他人のマスクについてはどのように感じているのだろうか。

「マスクをしていない人に近づくのは、抵抗がありますか」に「そう思う」または「ややそう思う」と回答した割合は、全体で 68.7%だった（図 3.5.4）。マスクについて、つけたくない理由のみを選択した人（全体の 30.6%）、つけたくない理由とつけたい理由が混在している人（全体の 34.8%）、つけたい理由のみを選択した人（全体の 25.4%）別にみると、つけたい理由のみを回答した人では 81.9%が、つけたくない理由のみを回答した人でも 56.9%が抵抗があると回答している。

図 3.5.4「マスクをしていない人に近づくのは、抵抗がありますか」に「そう思う」または「ややそう思う」と回答した割合



（注）全体と比べて有意差がある数値に±（5%有意水準）

3.5.3 おわりに

この調査は、2022 年 10 月に実施した。この時期は、感染の第 7 波がおさまりつつあった時期で、まだ暑さも残っていたことから、マスクを外すことに積極的になっていた

時期だった。調査においても、もっとも多かった意見が「暑い、息苦しいからつけたくない」であり、半数を超えていた。しかし、「つけたい」理由のみを回答した人、「つけたくない」理由のみを回答した人、「つけたい」「つけたくない」が混在している人等、マスク着用についての人々の意見は割れていた。ただし、マスクを「つけたくない」理由のみを回答した人でも、8 割が外出時には「ほとんど」または「常に」マスクを着用しており、半数がマスクをつけていない人に近づくのは抵抗があると回答しており、マスクをつけていることが常態化していた。

マスクをつけていることについて感じることは、男女で大きな差があり、女性は、感染不安と周囲の反応、さらには、「落ち着く」「自分の顔が見えにくくなる」という理由で「つけたい」という意見が多くみられた。感染に対する不安の違いによっても、当然のことながらマスクについて感じることの違いが見られた。

コロナ感染による致死率が低くなったとは言っても、今も感染不安を感じている人は多いと思われることから、マスクを着用したい人の意向も尊重しながら、社会の中でどのようにバランスをとっていくかが課題だろう。

3.6 小・中学生は、マスク着用をどう感じているか？[56]

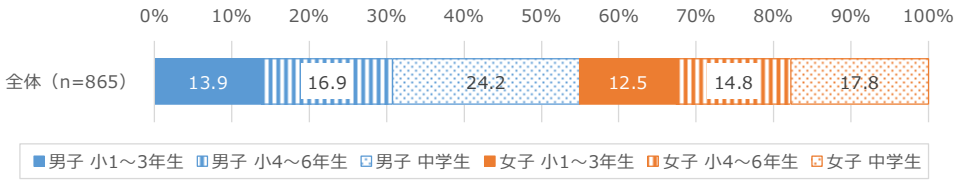
3.6.1 はじめに

マスク着用について、国は、屋外では原則不要、屋内でも距離が確保でき会話をほとんど行わない場合は不要との見方を、2022 年 5 月に示し、場面に応じた適切な着脱を促している。あわせて、子どもに対しては、2 歳未満の子どもについてはマスクを推奨しておらず、2 歳以上就学前の子どもについても着用を求めていない。着用する場合には、保護者や周囲の大人が子どもの体調に十分に注意をしたうえで着用するよう呼び掛けている。一方、就学児（小学生から高校生段階）については、屋外や体育の授業中、登下校時、および屋内でも人との距離が確保でき、ほとんど会話がない場合は不要としているが、屋内では、人との距離が確保できない場合や会話がある場合にはマスク着用を推奨している。

しかし、筆者が見る限りは、登下校中（徒歩通学）の子ども達もほとんどがマスクをしており、マスク着用は続いているようだ。これは、学校のルールなのか、家庭の方針なのか、感染不安による自発的なものなのかはわからない。

前項「子育て中の親は、マスク着用をどう感じているか？」では、本調査のアンケート調査部分の回答を用いて、小・中学生の親がマスクについてどう感じているか紹介した。本項では、小・中学生の子の回答を紹介する。対象となった子の属性の分布は図 3.6.1 の通りである。

図 3.6.1 対象となった子の属性（n=865）



3.6.2 マスクについて感じていること

(1) 全体　～半数以上が「あつい、いきぐるしいからつけたくない」

まず、マスクをつけることについて感じていることとして、つけたくない理由とつけたい理由を提示して、あてはまる意見をすべて選んでもらった。結果を、マスクをつけたくない理由とつけたい理由に分けて図 3.6.2 に示す。

---

56 本項で報告する結果は、以下に掲載された結果にもとづく。
村松・岩﨑（2023.1.31 発表予定）「小・中学生は、マスク着用をどう感じているか？」基礎研レポート

つけたくない理由として、もっとも高かったのは、「あつい、いきぐるしいからつけたくない」で全体の 52.9%を占めた。ついで「めんどうくさいからつけたくない」が 28.3%を占めた。つけたい理由としては、「ほかのひとからびょうきがうつりそうだから、つけたい」が 39.2%、「みんなつけているから、つけたい」が 25.1%と、2 割を超えた。

まだ暑さが残る 10 月だったこともあり、マスクによる感染予防効果に期待している子でも暑さや息苦しさを感じていたと思われる。つけたくない理由のいずれか1つでもあてはまる子は全体の 67.1%、つけたい理由のいずれか1つでもあてはまる子は全体の 56.8%だった。

親の回答と比較すると、子に対する質問の選択肢は完全には親に対する質問の選択肢と合致しているわけではないが、「あつい、いきぐるしいから、つけたくない」が最も高く、半数を超えていることや、つけたくない理由を1つでも選択した子が、つけたい理由を 1 つでも選択した子を上回ることで親の回答と同様の傾向を示した。

図 3.6.2 子どもがマスクについて感じていること（全体）n=865

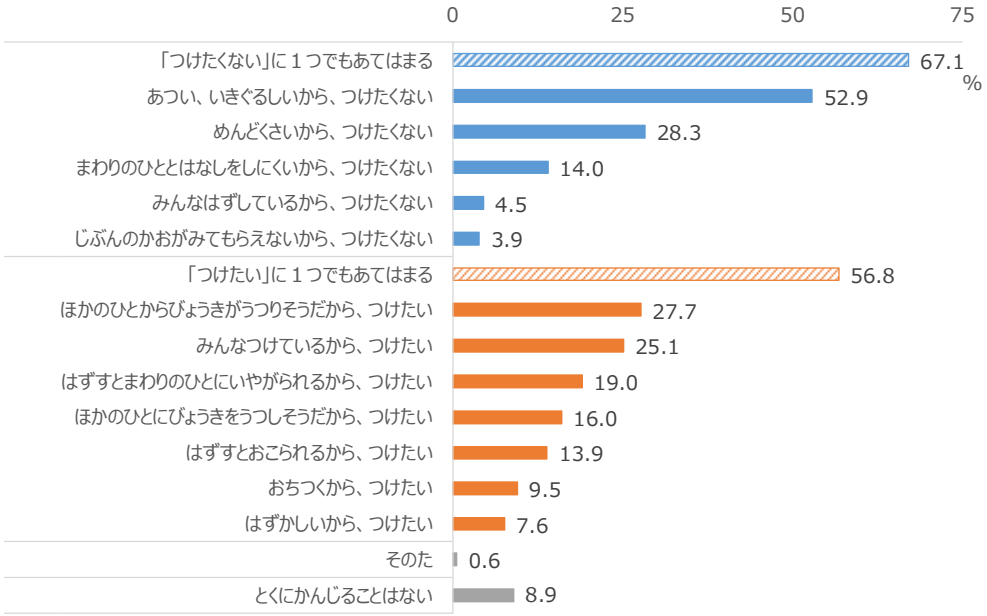
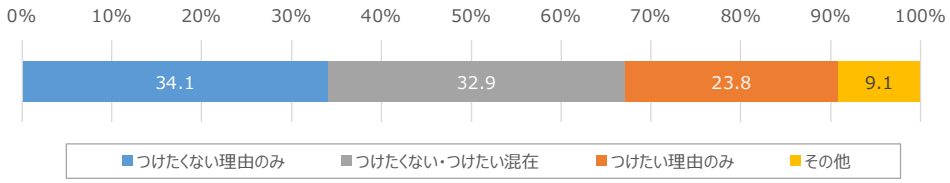


図 3.6.3 に示すように、回答パターンをみると、つけたくない理由のみ選択した子は 34.1%、つけたい理由とつけたくない理由が混在している子が 32.9%、つけたい理由のみ選択した子は 23.8%で、マスクについての感じ方の意見は割れている。感じ方の意見が割れている点も親の回答と同様である。つけたくない理由のいずれか1つでもあてはまる子は全体の 67.1%、つけたい理由のいずれか1つでもあてはまる子は全体の 56.8%だった。つけたくない理由のいずれか 1 つでもあてはまる子の割合は親（65.4%）より高く、つけたい理由のいずれか 1 つでもあてはまる子の割合は親（60.2%）より低い。

図 3.6.3 回答パターン（n=865）



(2) 男女・学年別

～男子は「めんどくさいから、つけたくない」、女子は「はずかしいから、つけたい」が高い。中学生では「はずすとまわりのひとにいやがられるから、つけたい」が高い

次に、マスクについて感じていることを男女・学年別に示したものが表 3.6.1 である。

性別にみると、男子は「めんどくさいから、つけたくない」、女子は「はずかしいから、つけたい」が、全体と比べて高い。

学年別にみると、中学生では「はずすとまわりのひとにいやがられるから、つけたい」が全体と比べて高い。

表 3.6.1 子どもがマスクについて感じていること（男女・学年別）

	n	「つけたくない」に1つでもあてはまる	あつい、いきぐるしいから、つけたくない	めんどくさいから、つけたくない	まわりのひととはなしをしにくいから、つけたくない	みんなはずしているから、つけたくない	じぶんのかおがみてもらえないから、	「つけたい」に1つでもあてはまる	ほかのひとからびょうきがうつりそうだから、つけたい	みんなつけているからつけたい	はずすとまわりのひとにいやがられるから、つけたい	ほかのひとにびょうきをうつしそうだから、つけたい	はずすとおこられるから、つけたい	おちつくから、つけたい	はずかしいから、つけたい	その他	とくにかんじることはない
全体	865	67.1	52.9	28.3	14.0	4.5	3.9	56.8	27.7	25.1	19.0	16.0	13.9	9.5	7.6	0.6	8.9
男子	475	68.6	53.5	31.2+	13.3	5.7	3.6	53.9	28.0	23.2	18.1	15.4	13.3	8.6	5.3−	0.6	9.7
女子	390	65.1	52.3	24.9−	14.9	3.1	4.4	60.3	27.4	27.4	20.0	16.7	14.6	10.5	10.5+	0.5	7.9
小１～３年生	228	69.7	56.6	28.5	14.5	4.8	4.8	53.1	24.1	25.4	14.0−	14.0	12.7	7.9	6.1	0.4	8.8
小４～６年生	274	66.4	51.1	28.1	12.0	4.4	3.6	56.2	27.0	23.4	18.6	15.0	14.6	9.9	8.4	0.4	10.2
中学生	363	65.8	52.1	28.4	15.2	4.4	3.6	59.5	30.6	26.2	22.3+	17.9	14.0	10.2	8.0	0.8	8.0

（注）全体と比べて有意差がある数値に±（5%有意水準）

(3) コロナ感染を心配している子で「つけたい」

続いて、自分のコロナ感染を心配しているか別に、マスクについて感じていることを示したものが表 3.6.2 である。自分のコロナ感染を心配している子は全体の 66.2%だった。

表 3.6.2 子がマスクについて感じていること（感染への心配有無別）

		n	「つけたくない」に1つでもあてはまる	あつい、いきぐるしいから、つけたくない	めんどくさいから、つけたくない	まわりのひととはなしをしにくいから、つけたくない	みんなはずしているから、つけたくない	じぶんのかおがみてもらえないから、つけたくない	「つけたい」に1つでもあてはまる	ほかのひとからびょうきがうつりそうだから、つけたい	みんなつけているからつけたい	はずすとまわりのひとにいやがられるから、つけたい	ほかのひとにびょうきをうつしそうだから、つけたい	はずすとおこられるから、つけたい	おちつくから、つけたい	はずかしいから、つけたい	その他	とくにかんじることはない
全体		865	67.1	52.9	28.3	14.0	4.5	3.9	56.8	27.7	25.1	19.0	16.0	13.9	9.5	7.6	0.6	8.9 %
自分のコロナ感染	しんぱいしている計	573	68.4	54.1	27.4	15.5	4.4	3.8	62.8+	34.2+	28.6+	22.5+	18.8+	15.5	9.4	9.1+	0.2−	6.3−
	しんぱいしていない計	253	64.0	51.0	28.1	9.5−	4.7	4.3	45.1−	15.0−	17.0−	11.5−	11.1−	9.9−	9.5	4.3−	1.6+	13.8+

（注 1）回答者自身のコロナ感染について、「とてもしんぱい」「すこししんぱい」を「しんぱいしている」、「あまりしんぱいしていない」「まったくしんぱいしていない」を「しんぱいしていない」とした。

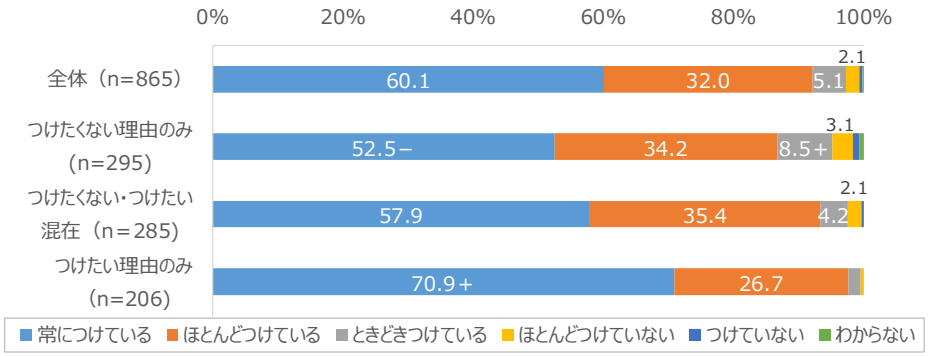
（注 2）全体と比べて有意差がある数値に±（5%有意水準）

自分のコロナ感染を心配しているかどうかでみると、「つけたくない」に1つでもあてはまる子の割合は、心配している子でも、心配していない子と同程度だった。「つけたい」については、コロナ感染を心配している子では、「ほかのひとからびょうきがうつりそうだから、つけたい」「みんなつけているからつけたい」「はずすとまわりのひとにいやがられるから、つけたい」「ほかのひとにびょうきをうつしそうだからつけたい」「はずかしいからつけたい」が全体と比べて高く、心配していない子を上回る項目が多い。

(4)「つけたくない」理由しか選択していない子でも 9 割近くがほとんどつけている。親がマスクをつけている頻度より高い可能性。

マスクをつけることについて感じていることについて、「つけたくない」理由と「つけたい」理由を示したが、実際にマスクをつける頻度はどの程度違うのだろうか。子が外出時にマスクをつけている頻度を親に回答してもらった結果を図 3.6.4 に示す。その結果、全体では 60.1%が「常につけている」、32.0%が「ほとんどつけている」だった。ほとんど以上の頻度でつけている子は、これらを合わせて 92.1%にのぼる。つけたい理由のみを回答した子では、それぞれ 70.9%、26.7%で、合計 97.6%がほとんど以上の頻度でつけていた。一方、つけたくない理由のみを回答した子では、それぞれ 52.5%、34.2%で、ほとんど以上の頻度でつけている子は 86.7%だった。つけたくない理由しかない子でも 5 割以上が「常につけている」で、計 9 割近くがほとんど以上の頻度でつけていることから、つけたい理由をもつ子と比べて低いものの、かなりの高頻度と言えるだろう。

図 3.6.4 子が外出時にマスクをつける頻度（親が子の着用頻度を回答）



（注 1）全体と比べて有意差がある数値に±（5%有意水準）

（注 2）2.0%未満は数値の表記を省略

また、親が外出時にほとんど以上の頻度でつけている割合は全体で 89.1%（つけたくない理由のみで 82.4%、つけたくない・つけたい混在で 91.4%、つけたい理由のみで 93.3%）だった。子のマスクをつける頻度については、親が回答しているため、直接比較をするには注意が必要ではあるものの、子がマスクをつける頻度は、親よりも高い可能性がある。

3.6.3 おわりに

この調査は、2022 年 10 月に実施した。この時期は、感染の第 7 波がおさまりつつあった時期で、まだ暑さも残っていたことから、マスクを外すことに積極的になっていた時期だった。子どもに対する調査においても、親と同様に、もっとも多かった意見が「あつい、いきぐるしいからつけたくない」であり、半数を超えていた。

しかし、「つけたい」理由のみを回答した子、「つけたくない」理由のみを回答した子、「つけたい」「つけたくない」が混在している子等、親と同様に子ども達の意見も割れていた。

外出時にマスクをつけている頻度は、全体の 92.1%がほとんど以上の頻度でつけており、ほとんど以上の頻度でつけている子の割合は親より高い可能性があった。

子ども達の中でも、感染不安をもつ子は 7 割弱と高く、感染予防のためにマスクをつけたいと感じている子は 3 割程度いることから、脱マスクに向けては、こういった子ども達の不安をいかに軽減するかが課題となるだろう。

また、女子で「はずかしいから、つけたい」が 1 割を超えていた。マスクが常態化したことで、素顔をさらすことに抵抗をもつ子がいる可能性がある。親への調査においても女性で「自分の顔が見えにくくなるからつけたい」が高いことから、見た目についての女性または女子において共通する考え方がある可能性もある。今後も注視していきたい。

3.7 コロナ禍における子育てについての親の思い[57]

3.7.1 はじめに

新型コロナウイルス感染症の流行が開始してから、感染予防のために、人込みや外出を控えることが増えた。学校の休校が続いたほか、多くの学校行事が中止された。また、普段の学校生活においては、マスク着用や黙食が常態化した。こういった生活が始まって 3 年が経過し、子育て中の親にとっては、感染拡大防止や、自分たちの健康のためとは言っても、子どもの成長機会を逃してしまうのではないか、コミュニケーション力が培われないのではないかといった不安があるだろう。

本項では、本調査のアンケート調査部分として、調査票の最後に「コロナ対策／マスク着用／コロナ禍での子育てに対する思い等をご自由にお書きください（1000 文字まで）。」といった形で設けた、自由記述欄の回答について、テキストマイニングの手法である KH Coder[58]を利用して分析した結果を紹介する。

3.7.2 使われている単語とその組み合わせ

(1) 頻出単語（名詞）

まず、自由回答の内容について、明らかな誤字・脱字を修正した上で、使用した人が多かった単語をみたものが表 3.7.1 である。どういったテーマの記述があったかに注目するために、名詞に限定して示した。

その結果、最も使った人が多かった単語が「マスク」で、171 人（40%）が使っていた。次いで「子ども」が 116 人（27.2%）、「コロナ」が 84 人（19.7%）、「学校」が 58 人（13.6%）、「感染」「生活」が 55 人（12.9%）、と続いた。

表 3.7.1 使った人が多かった単語

抽出語	使った人数
マスク	171
子ども	116
コロナ	84
学校	58
感染	55
生活	55
心配	53
着用	38
行事	35
制限	35
対策	32
表情	26
人	24
気	18
中止	18
機会	17
顔	16
大人	16
影響	15
経験	15
友達	15
家族	14
コミュニケーション	13
親	12
ワクチン	11
行動	11
自分	11
活動	10
子	10
思い	10

57 本項で報告する結果は、以下に掲載された結果にもとづく。
村松・岩﨑（2023.1.12）「コロナ禍における子育てについての親の思い」基礎研レポート
（https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=73595?site=nli、2023/1/26 アクセス）

58 「KH Coder3」を使用した（http://khcoder.net/）。辞書（形態素解析）には「MeCab」を使用

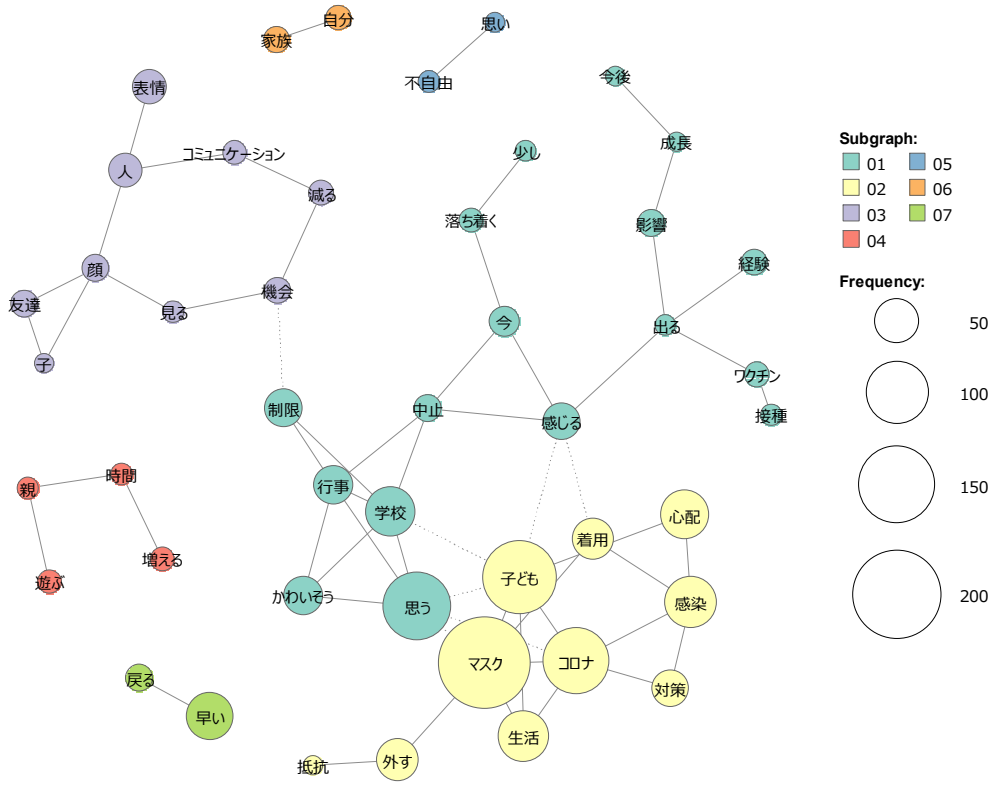
(2) 共起ネットワーク

続いて、使用された単語について、回答者ごとに同時に使用されることが多かった単語を線で結んだ共起ネットワークを図 3.7.1 に示す。同時に使われた語のグループが同じ色で示され、使われた回数が多い語ほど大きく描かれている。

この図から、自由記述欄の話題は、大きく 7 個のテーマに分けられることが読み取れる。「行事が中止されたり制限が多くてかわいそう」「ワクチン接種に戸惑いがある」「成長に影響がありそう」等といった「行動制限や学校行事の中止等による経験不足、およびワクチン接種による今後の成長への影響（01●）」に関する話題、「マスクの感染予防効果」に関する賛否、「マスクを外すことに抵抗がある」といった「マスク着用の感染予防効果やマスク常用に付随する弊害（02●）」に関する話題、「コミュニケーション力が延びない」「表情がわかりづらい」「友達の本当の顔を知らない」「体験の機会が減る」といった「コミュニケーションや機会喪失による影響（03●）」に関する話題、「親として」「子どもどうしで外で遊んでほしい」「親と遊ぶ時間が増える」といった「外で友達と遊んでほしいという親の願い（04●）」、「不自由な思いをさせていること（05●）」、「家族のつながりが強まった」「家族に感染がひろがる」といった「家族の感染不安や、家族関係の変化（06●）」に関する話題、「早く以前の生活に戻ってほしいこと（07●）」等の話題があった。

した。参考文献：樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して―』ナカニシヤ出版

図 3.7.1　自由記述欄　共起ネットワーク



3.7.3 回答者（および子）の属性による特徴

特徴的な単語のうち、「行事・イベント（いずれか1つでも含む）」「制限」「表情」「経験・体験（いずれか1つでも含む）」という単語をどういった人が使ったかを確認するために、これら4つの単語の使用頻度を、回答者の性別、育児負担（回答者の負担割合）、子の性別、子の学年、子がマスクをつけること／外すことに対して不快に感じていると思うかどうか、子が通っている学校の感染対策が過剰だと思うか別に比較した（表 3.7.2）。

その結果、「行事・イベント」「表情」については、父親より母親の方が使用することが多かった。育児負担別にみると、9～10 割負担している人で「行事・イベント」と「表情」、7～8割負担している人で「制限」を使用していることが多かった。また、女児（小4～6）で「行事・イベント」を使用していることが多かった。子どもがマスクをつけることに対して、「不快に感じているように見えない」で「行事・イベント」を使用していることが多かった。子がマスクを外すことに対して不快に感じていると思うか、子どもが通っている学校の感染対策が過剰だと思うかによる差はなかった。

表３.7.2 「行事・イベント」「制限」「表情」「経験・体験」を使用する人の特徴

		n	行事・イベント	制限	表情	経験・体験	
全体		426	10.1	8.2	6.1	4.7	(%)
回答者性別	男性	241	5.0	7.1	3.3	5.0	
	女性	185	16.8	9.7	9.7	4.3	
育児負担（回答者の負担割合）	０～１割	48	10.4	10.4	8.3	6.3	
	２～３割	120	2.5	5.0	2.5	5.0	
	４～６割	75	5.3	6.7	2.7	4.0	
	７～８割	90	16.7	13.3	7.8	4.4	
	９～10割	93	17.2	7.5	10.8	4.3	
子の性別・学年	男児（小１～３）	57	7.0	5.3	10.5	8.8	
	男児（小４～６）	72	6.9	5.6	6.9	1.4	
	男児（中学）	97	5.2	10.3	4.1	4.1	
	女児（小１～３）	51	13.7	11.8	3.9	2.0	
	女児（小４～６）	63	17.5	7.9	4.8	6.3	
	女児（中学）	86	12.8	8.1	7.0	5.8	
子がマスクをつけること	不快に感じているように見える	166	6.0	8.4	5.4	4.8	
	不快に感じているように見えない	255	12.5	7.8	6.7	4.3	
子がマスクを外すこと	不快に感じているように見える	198	10.6	9.6	4.5	5.1	
	不快に感じているように見えない	206	9.7	7.3	7.3	4.4	
通っている学校の感染対策	過剰だと思う	166	9.6	7.2	7.2	4.8	
	過剰だと思わない	260	10.4	8.8	5.4	4.6	

（注）「全体」と有意差がある数値に網掛け（全体よりも高い数値にピンクの網掛け、低い数値にブルーの網掛け）有意水準５％

3.7.4 おわりに

本調査では、マスク着用頻度や場面、マスクについての考え方を尋ねた後で、コロナ禍での子育てに対する思いを記述してもらったため、「マスク」に対する意見が多く見られた。

マスクの感染対策としての有効性に対する賛否とともに、感染予防をすること／子にさせることは重要であるが、親として、経験させてあげたい多くの学校行事やイベントがあると考えられ、自由記述からもマスク生活の重要性とともに弊害や、表情の読み取りやコミュニケーション力への影響、その他自由に遊ばせてあげたいという思いが多く記述されていた。また、マスク常態化についての感じ方は、親の性別や育児負担によって異なる可能性があった。

4. 実験を用いた分析結果

4.1 マスク着用が表情認識に与える影響[59]

4.1.1 はじめに

コロナ禍で多くの人が日常的にマスクをつけるようになった。そして現在、日本では多くの人のマスク着用が常態化していると考えられる。マスクは、感染拡大を抑止する効果が期待できるが、相手の表情が読み取りづらいことで、コミュニケーションを阻害する懸念もある。しかし、マスク着用が人々の表情認識にどのような影響を及ぼすか国内外での研究蓄積は少なく、一致した見解は出ていない。特に影響が大きいと考えられる子どもへの影響の検証を行った研究は、国内でも国外でも研究蓄積が少ない。そこで本項では、本調査の WEB 実験部分の回答を用いて、マスク着用の感情認識への影響を検証した結果を紹介する。

結果を先取りしてお伝えすると、以下のとおりである。

- マスクの着用は、顔を見た人（親の回答者、子の回答者ともに）に、笑っていると認識させにくくする影響が見られる。
- マスクの着用が顔を見た人に笑っていると認識させにくくする影響は、マスクの下で歯の見えるような大きな笑顔をしている際ではなく、歯の見えない表情（無表情）をしている際に特に大きい傾向が見られる。
- マスクの着用が、マスクの下で歯の見えない表情（無表情）をしている際に、顔を見た人に笑っていると認識させにくくする影響について、親の回答者が顔を見た場合と子の回答者が顔見た場合を比較すると、親の回答者が見た場合に受ける影響の方が大きい傾向が見られた。
- そしてこれは、親の回答者は子の回答者に比べて、もともとマスクを着用していない人を見た場合でも、笑っていると認識しやすい傾向によるものである可能性が示唆された。
- さらに、子の回答者がもともとマスクの着用をしていない、歯の見えない表情（無表情）の大人の写真を見た場合に親の回答者に比べて笑っていると感じにくい傾向は、子の回答者の中でも特に低年齢の子の間で顕著に見られた。

---

59 本項で報告する結果は、以下に掲載された結果にもとづく。
岩﨑・村松（2023.1.27）「マスク着用が表情認識に与える影響」基礎研レポート
（https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=73737?site=nli、2023/1/27 アクセス）

4.1.2 WEB 実験の設計

本調査の回答数は、親の回答者とそれぞれの子、各 1,000 名であるが、本項で紹介する分析では、このうちアンケート調査中の WEB 実験部分の回答の分析の同意を頂いた 937 組の親子（親子合わせて 1874 名）の回答を用いた。

私たちのマスクの表情認識への影響を検証するランダム化比較試験（RCT）の実験設計は、2 つのステップに分かれる。まず、参加者はステップ 1 として、私たちが用意した 16 種類の画像の中からランダムに選ばれた 1 つの画像を 1 分間観察する。16 種類の画像は、40 代前後の男性、40 代前後の女性、小学生の男の子、小学生の女の子の 4 名について、それぞれ、歯の見える表情（笑顔）の写真と、歯の見えない表情（無表情）の写真を用意した上で、マスクを着用していない状態の写真と、マスクを着用していない状態の写真にマスクを合成した写真を用意した。画像の詳細及び、それぞれの画像に割り振られた実験参加者の数は、表 4.1.1 の通りである。

画像を見た後に、参加者はステップ 2 として、「画面に写った人はどのような表情をしていましたか？」という質問に対し、4 つの選択肢（笑っている/泣いている/怒っている/無表情）の中から回答を選択する。親が実験に参加した後には、親及び子本人の同意を得た上で、子（小学生から中学生）にも同じ実験に参加頂いた。

表 4.1.1 16 種類の画像に写った人物の詳細と参加者の割り当て

	画像についての詳細			割り当てられた参加者数	
	大人/子ども・性別	歯の見える表情有無（笑顔／無表情）	マスク有無	親	子
画像 1	大人・男性	無（無表情）	無	67	64
画像 2			有	72	57
画像 3		有（笑顔）	無	56	38
画像 4			有	60	65
画像 5	大人・女性	無（無表情）	無	54	49
画像 6			有	62	44
画像 7		有（笑顔）	無	59	74
画像 8			有	52	50
画像 9	子ども・男児	無（無表情）	無	57	62
画像 10			有	57	64
画像 11		有（笑顔）	無	60	70
画像 12			有	59	60
画像 13	子ども・女児	無（無表情）	無	53	70
画像 14			有	59	61
画像 15		有（笑顔）	無	48	57
画像 16			有	62	52
				計 937	計 937

注）画像 1～4、5～8、9～12、13～16 はそれぞれ同一人物の画像。また、偶数画像は、1 つ前の奇数画像（画像 2 なら画像 1、画像 16 なら画像 15 に、マスクを合成した画像である。）

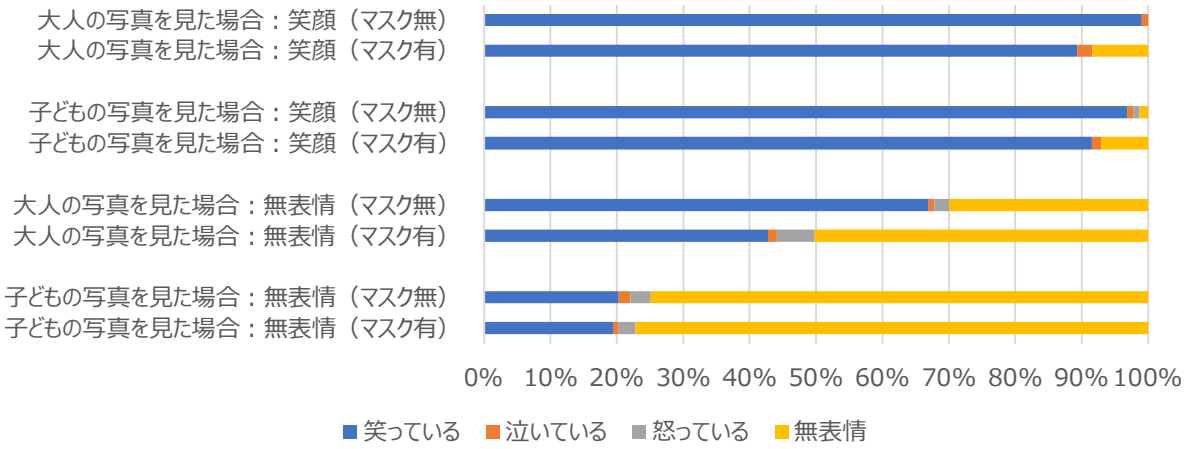
4.1.3 実験結果

(1) マスクの有無と表情認識

まず、歯の見える表情の写真を見た場合とそうでない場合(歯の見える表情を「笑顔」、そうでない場合を「無表情」としている[60])及び大人の写真を見た場合と、子どもの写真を見た場合について、親の回答と子の回答を分けずに、全体として、マスクの有無による表情認識の違いを確認したのが、図 4.1.1 である[61]。

図 4.1.1 からは、全体として、「笑顔」の写真を見た場合でも、「無表情」の写真を見た場合でも、マスクを着用している写真を見た場合には、笑っていると感じる人の割合は小さくなっている傾向が見られる。そしてこその傾向は、今回用意した写真の中では、大人の「無表情」の写真を見た時に強く表れているようだ[62]。

図4.1.1 歯の見える写真(笑顔)を見た場合とそうでない写真(無表情)を見た場合のマスクの影響の違い



60 本項では、「笑顔」と「無表情」を、歯の見える表情の写真を見た場合とそうでない場合で定義しているため、実際の日常の中で人々が感じる「笑顔」や「無表情」とは異なる可能性がある。

61 本項で紹介する分析では、大人の写真、子どもの写真ともに、男性の写真と女性の写真の区別は行っていない。

62 親と子を合わせたデータを用いて、笑っていると感じた場合に 1 をとり、その他の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数、マスク有画像ダミー、無表情画像ダミー、大人画像ダミー、マスク有画像ダミー×無表情画像ダミー、マスク有画像ダミー×大人画像ダミー、無表情画像ダミー×大人画像ダミー、マスク有画像ダミー×無表情画像ダミー×大人画像ダミーを説明変数とした線形確率モデルの推定を行うと、マスク有画像ダミーは負で統計的に有意(有意水準 5%)、マスク有画像ダミー×大人画像ダミーは有意でない(有意水準 10%)、マスク有画像ダミー×無表情画像ダミーは有意でない(有意水準 10%)、そして、マスク有マスク有画像ダミー×無表情画像ダミー×大人画像ダミーの係数が負で統計的に有意である(有意水準 1%)。このことからも、笑顔の写真を見た場合でも無表情の写真を見た場合でも、マスクは笑っていると感じる人の割合を減少させることと、今回の画像では、大人の無表情の画像を見た場合のマスクの表情認識への影響が、その他の画像を見た時よりも大きいことが確認できる。

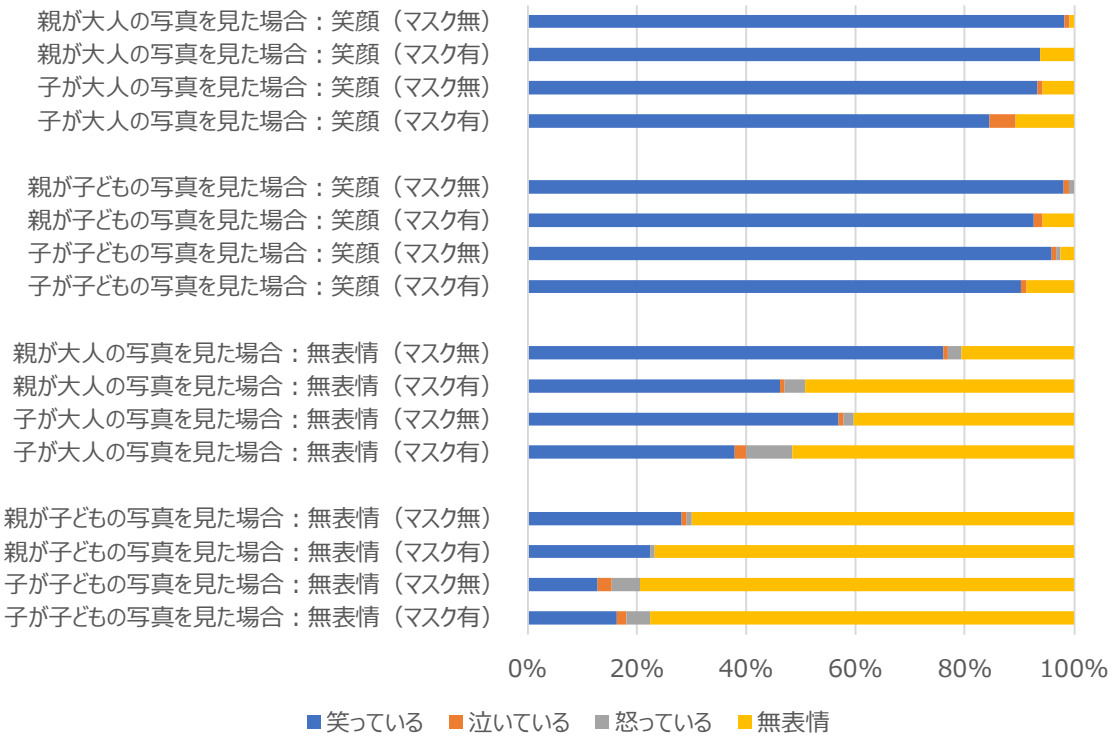
(2) 親が写真を見た場合と子が写真を見た場合の違い

さらに、親の回答者がそれぞれの写真を見た場合と、子の回答者がそれぞれの写真を見た場合に分けて、マスク着用の影響を確認したのが、図 4.1.2 である。まず、親の回答者と子の回答者の表情認識を比較すると、「笑顔」の写真を見た場合にも、「無表情」の写真を見た場合にも、マスクの有無にかかわらず、親の回答者の方が子の回答者に比べて写真に写った人を笑っていると感じる傾向が見られる。

特に「無表情」でマスクをしていない人の写真を見たときに、親の回答者は子の回答者に比べて、笑っていると感じる傾向が見られる。子どもの写真を見た時よりも大人の写真を見たときにその傾向は強いようだ。一方で、「無表情」でマスクをした写真を見た時には、マスクをしていない写真を見た時ほど、親の回答者と子の回答者の認識の差は大きくない。そのため、親は子に比べて「無表情」の人、特に無表情の大人の写真を見た際に、マスクの影響で笑っていると感じなくなる傾向が強くみられるようだ[63]。

[63] 親と子を合わせたデータを用いて、笑っていると感じた場合に 1 をとり、その他の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数、マスク有画像ダミー、無表情画像ダミー、親回答ダミー（回答者が親である場合に 1 をとるダミー）、マスク有画像ダミー×無表情画像ダミー、マスク有画像ダミー×親回答ダミー、無表情画像ダミー×親回答ダミー、マスク有画像ダミー×無表情画像ダミー×親回答ダミーを説明変数とした線形確率モデルの推定を行うと、マスク有画像ダミーの係数は負で統計的に有意（有意水準 1%）、親回答ダミーの係数は正で統計的に有意（有意水準 5%）、無表情画像ダミー×親回答ダミーの係数は正で統計的に有意（有意水準 1%）、マスク有画像ダミー×無表情画像ダミー×親回答ダミーの係数が負で統計的に有意である（有意水準 10%）。このことからも、親の方がマスクの有無や「笑顔」「無表情」にかかわらず笑っていると感じる傾向があること、無表情の画像を見た場合のマスクの表情認識への影響が子よりも親の間で大きいことが確認できる。
さらに、大人の画像を見た回答者と子どもの画像を見た回答者を分けて、同様のモデルを推定すると、マスク有画像ダミー×無表情画像ダミー×親回答ダミーの係数どちらも有意水準 10%では有意ではないものの、大人の画像を見た回答者の間の方が、係数が小さく、かつ、有意水準 15%では有意であったことから、大人の画像を見た場合により影響が強かった傾向が示唆される。

図4.1.2 大人の写真を見た場合と子どもの写真を見た場合の分布の違い



(3) 小学生が写真を見た場合と中学生が写真を見た場合の違い

親の回答者が「無表情」の人を見たときに笑っていると感じる傾向があるのは、これまでの様々な人々との交流経験を子より多く持っていることによって、表情を認識する力をより強く身に着けているためである可能性が考えられるかもしれない。今回使用した写真は、日常の一場面の写真ではなく、カメラに視線があたっている写真であることから、日常における「無表情」より視線が定まっていることでやや明るい印象があるかもしれない。そうした中で、親が「無表情」の人を見た時に、マスクをつけることによってより大きな影響を受けるのは、顔のより多くの部分から表情を判断しているからという可能性も考えられる。そして、こうした表情を認識する力は子の成長過程によって身についていくものである可能性が考えられる。そこで、子の表情認識について、小学校低学年、小学校高学年、及び中学生に分けて違いを確認したのが、図 4.1.3 である。

図4.1.3 大人の無表情の写真を見た場合の年齢層別の分布の違い

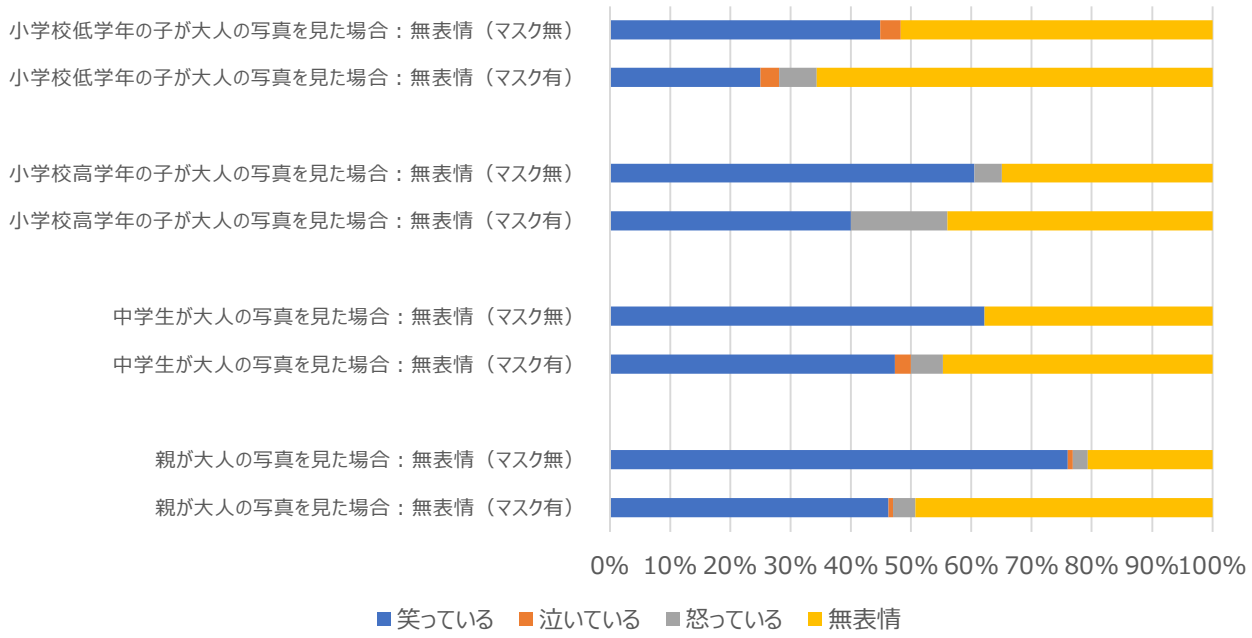


図 4.1.3 の分布から、マスクをしていない状態でもマスクをした状態でも、大人の「無表情」の写真を見た際について、笑っていると感じる人の割合は、小学校低学年の回答者の間で特に低い傾向が見られる[64]。そして、中学生の間では、マスク無の写真を見た場合には、親の回答者よりも笑っていると感じる人の割合が若干小さいものの、マスク着用の写真を見た際に笑っていると感じる人の割合は、親の回答者とほとんど変わらないようだ[65]。マスクを着用した人の顔を見た場合の中学生の表情認識は親の回答者と同程度であるが、マスクを着用していない人の顔を見た場合の表情認識は親の回答者と少し異なることの要因について、コミュニケーション経験の積み重ね年数の違いの他、コロナによるマスク着用の常態化が考えられるのか、今後の課題として検討していく必要があるだろう。また、もともと表情認識が親の回答者と大きく異なる可能性のある小学校低学年の子への、マスク常態化の将来的な表情認識への影響の検討も重要な課題と考えられる。

---

[64] 大人の無表情の画像を見た人（親と子）のみを抽出して、笑っていると感じた場合に 1 をとり、その他の場合に 0 をとるダミー変数を被説明変数、マスク着用画像ダミー、学年カテゴリー（親、小学校低学年の子、小学校高学年の子、中学生）及び学年カテゴリーとマスク着用画像ダミーの交差項を説明変数とした線形確率モデルの推定を行うと、学年カテゴリーダミーの係数は、親カテゴリーを参照カテゴリーにした場合、低学年になるほど、大きくマイナスの値になる傾向が見られた。（小学校低学年のカテゴリーでは有意水準 1%で負）。一方、交差項の係数で統計的に有意なものはなかった。

[65] 注 63 の推定で中学生のカテゴリーダミーの係数は、有意水準 15%で統計的に有意に負の値であった。

4.1.4 おわりに

本項では、本調査のWEB実験部分の結果を元に、マスクを着用することの、親世代（24～64 歳）及び子世代（小中学生）の表情認識への影響を確認した。本項で紹介した結果は主に以下の 6 点である。

① マスクの着用は、それを見た親の回答者（24～64 歳）にも子の回答者（小・中学生）にも、笑っていると認識させにくくする影響が見られる。
② マスクの着用がそれを見た人に笑っていることを認識させにくくする影響は、マスクの下で歯の見えるような大きな笑顔をしている場合よりも、歯の見えない表情（無表情）をしている場合に特に大きい傾向がある。
③ 歯の見えない表情（無表情）をしている人を見た際に、マスクによって笑っていると感じにくくなる影響の大きさについて、親の回答者と子の回答者で比較すると、親の回答者が受ける影響の方が大きい傾向がある。
④ 歯の見えない表情（無表情）をしている人を見た際に、マスクによって笑っていると感じにくくなる影響について、子よりも親の回答者の間で大きい傾向が見られるのは、親の回答者に比べて子の回答者は、もともとマスクを着用していない人を見た場合でも、笑っていると認識しにくい傾向によるものである可能性が示唆される。
⑤ マスクを着用していない、歯の見えない表情（無表情）の大人の写真を見た際に、笑っていると感じにくい傾向は、子の回答者の中でも特に低年齢の子の間で顕著に見られる。
⑥ マスクの着用をした人を見た場合の中学生の回答者の表情認識は親の回答者と同程度であるが、マスクを着用していない人を見た場合には、親の回答者よりもやや笑っていると感じにくい可能性がある。

こうした親と子の表情認識やマスクの影響の違いは、コミュニケーション経験の積み重ね年数の違いが原因である可能性が考えられるが、コロナによるマスク着用の常態化の影響も考えられるのか、今後の課題として検討していく必要があるだろう。また、もともと表情認識が大人と大きく異なる可能性があることが示された子どもたち、とくに、低年齢層の子への、マスク常態化の将来的な表情認識への影響の検討は、今後の重要な課題であると考えられる。

4.2 マスク着用が周りの人の感情に与える影響[66]

4.2.1 はじめに

コロナ禍で多くの人が日常的にマスクをつけるようになった。そして現在、日本では多くの人のマスク着用が常態化していると考えられる。マスクは、感染拡大を抑止する効果が期待できるが、マスクをした人の表情が読み取りづらくなる可能性がある。そこで、一般に、感情が周りの人に伝染するという心理学で情動伝染[67]と呼ばれる現象の効果が薄まることで、幸せな気持ちの伝達を阻害する可能性が考えられる。しかし、マスク着用の常態化が人々のウェルビーイングにどのような影響を及ぼすか国内外での研究蓄積は少なく、一致した見解は出ていない。特に影響が大きいと考えられる子どもへの影響の検証を行った研究は、国内でも国外でもほとんど存在していない。そこで、本項では、本調査の実験部分の回答を用いて、マスクを着用の周囲の人々のウェルビーイングへの影響を検証した結果を紹介する。

本項で紹介する結果を先取りしてお伝えすると、以下の通りである。

- 子どもの笑顔は、周りの人のポジティブな感情が高める傾向見られる。
- 子どもの笑顔は、周りの人のポジティブな感情を高めるが、マスクをした子どもの笑顔の場合は、周りの人のポジティブな感情を高める効果は小さくなる傾向がある。特に周りの大人に比べて、周りの子どものポジティブな感情を高める効果は小さくなる可能性がある。
- マスクの着用は、人々に笑顔を認識させにくくすることで、それを見た人々のポジティブな感情を高めにくくさせている可能性がある。
- マスクの着用は、周りの人のガティブな感情を下げる効果を小さくする可能性がある。

4.2.2 WEB 実験の設計

本調査の回答数は、親の回答者とそれぞれの子、各 1,000 名であるが、本項で紹介する分析では、このうちアンケート調査中の WEB 実験部分の回答の分析の同意を頂いた 937 組の親子（親子合わせて 1874 名）の回答を用いた。

私たちのマスクの感情への影響を検証する RCT の実験設計は、図 4.2.1 で示したように、4 つのステップに分かれる。まず、参加者はステップ 1 として、感情の状態を測

---

66 本項で報告する結果は、以下に掲載された結果にもとづく。
岩﨑・村松（2023.1.30 発表予定）「マスク着用が周りの人の感情に与える影響」基礎研レポート

67 医療法人社団平成医会 2020.6.22「感情の伝染とメンタルヘルス」(https://heisei-ikai.or.jp/column/emotional-contagion/, 2023 年 1 月 19 日アクセス)

定する質問に回答する。そして、ステップ 2 として、私たちが用意した 16 種類の画像の中からランダムに選ばれた 1 つの画像を 1 分間観察する。16 種類の画像は、40 代前後の男性、40 代前後の女性、小学生の男の子、小学生の女の子の 4 名について、それぞれ、歯の見える表情（笑顔）の写真と、歯の見えない表情（無表情）の写真を用意した上で、マスクを着用していない状態の写真と、マスクを着用していない状態の写真にマスクを合成した写真を用意した。 画像の詳細及び、それぞれの画像に割り振られた実験参加者の数は、前節の表 4.1.1 に掲載した通りである。

画像を見た後に、参加者はステップ3として、「画面に写った人はどのような表情をしていましたか？」という質問に対し、4 つの選択肢（笑っている/泣いている/怒っている/無表情）の中から回答を選択する。そして最後にステップ4として、ステップ1と同じように、感情の状態を測定する質問に回答する。ステップ 1 とステップ 4 での感情の状態を測定する質問には、黒川ら(2014) [68]の研究に従って、簡易気分調査票日本語版（BMC-J）[69] [70] [71]を用いた。親が実験に参加した後には、親及び子本人の同意を得た上で、子（小学生から中学生）にも同じ実験に参加頂いた[72][73]。

---

[68] 黒川 博文,犬飼 佳吾,大竹 文雄(2014)「感情の変化が時間選好に及ぼす影響:プログレス・レポート」行動経済学 7　45-49

[69] 田中健吾、2008.「簡易気分調査票日本語版（BMC-J）の信頼性および妥当性の検討」大阪経大論集 58 p 271-275

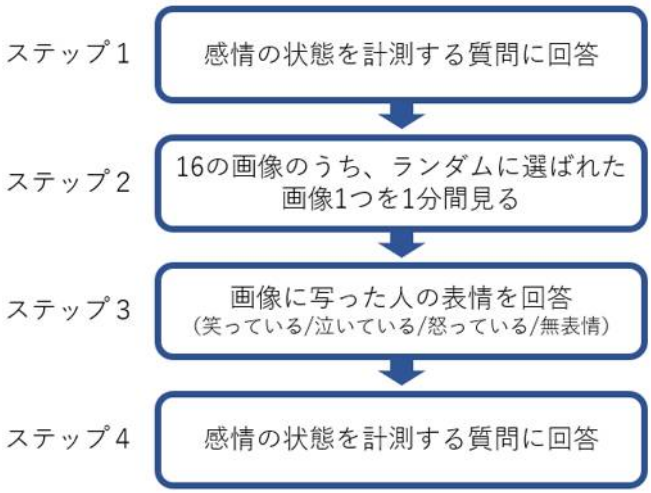
[70] Thomas, D. L., and E. Diener, 1990. Memory accuracy in the recall of emotions. Journal of Personality and Social Psychology 59, 291.

[71] この尺度は、4 種類のポジティブな感情に関する語句（うれしい/心地よい/幸福である/楽しい・面白い）と、5 種類のネガティブな感情に関する語句（イライラ している/不愉快だ/怒り・敵意を感じる/気分が沈んでいる・憂鬱である/何となく心配だ・不安だ）が含まれている。そして、それぞれの質問について回答したそ の時の気持ちで、7 件法（0=全く当てはまらない; 6=非常に当てはまる）で回答頂くものである。このうち、ポジティブな感情を聞く設問 4 問を利用し、その 4 つの 回答を足し合わせて、ポジティブな感情の変数と定義し、ネガティブな感情を聞く設問 5 問を利用し、その 5 つの回答を足し合わせてネガティブな感情の変数と定義した。子への質問の際は、感情に関する語句を簡単にした上で、5 件法で訪ねた他、「答えたくない」を選択することも可能とした。「答えたくない」をポジティブな感情の変数を作成する場合はその設問のいずれかで、ネガティブな感情の変数を作成する場合はその設問のいずれかで選択した人は除外して分析している。子の回答者について、ポジティブな感情/ネガティブな感情の変数を作成する場合は、親の変数と最大値および最小値を合わせることを目的として、0 点から 6 点の間を 1.5 点おきの点数としてポジティブ変数を作成して、分析を行っている。

[72] 子に回答頂く際は、ステップ 2 では、わらっている/ないている/おこっている/「わらっている」「ないている」「おこっている」のどれでもない/答えたくないの 5 つの選択肢から回答頂いた。図 4.2.1～図 4.2.3 では、親への質問への回答と合わせて、「わらっている」は「笑っている」、「ないている」は「泣いている」、「おこっている」は「怒っている」、『「わらっている」「ないている」「おこっている」のどれでもない』は「無表情」として掲載している。また、「答えたくない」を選択した子の回答者（70 名）の回答は除外して分析を行った。また、親と子に表示される画像は、それぞれランダムに選ばれているため、親子でも同じ画像が表示されるとは限らない。

[73] 本実験では機械的にランダム化を行っているが、後の項で紹介するポジティブな感情やネガティブな感情の介入前の数値（ステップ1で計測した値）について、グループごとに違いが生

図 4.2.1 WEB 実験のステップ



4.2.3 実験結果

(1) マスクの有無とポジティブな感情の変化

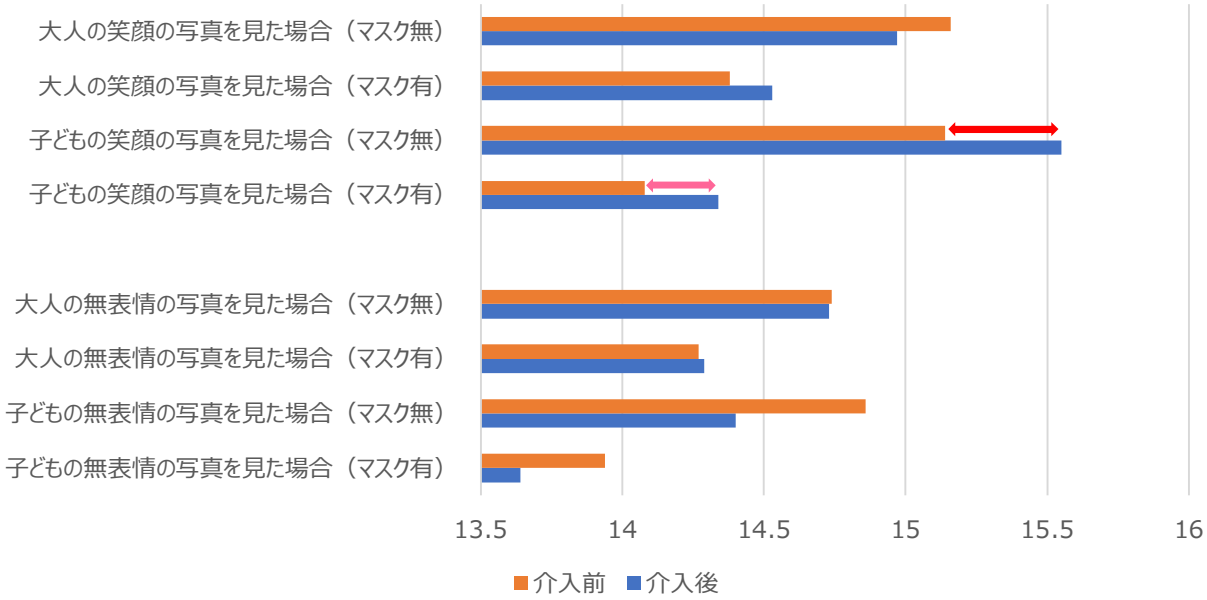
まず、歯の見える表情の写真を見た場合とそうでない場合(歯の見える表情を「笑顔」、そうでない場合を「無表情」としている)及び大人の写真を見た場合と、子どもの写真を見た場合について、親の回答と子の回答を分けずに、全体として、マスクの有無によるポジティブな感情の変化の違いを確認したのが、図 4.2.2 である[74]。図 4.2.2 からは、今回用意した写真の中では、子どもの「笑顔」の写真を見た時に、マスクの有無にかかわらず、参加者のポジティブな感情が高まった傾向が確認される(図内赤矢印はマスク無の子どもの笑顔を見た時のポジティブな感情の増加幅、図内ピンク矢印はマスク有の子どもの笑顔を見た時のポジティブな感情の増加幅)。また、子どもの笑顔の写真を見た場合に、ポジティブな感情が高まる度合いは、マスクを着用することによって、小さくなる傾向もみられる(図内赤矢印の長さがピンク矢印よりも長い)[75]。

じている点には、注意が必要である。

[74] 本項で紹介する分析では、大人の写真、子どもの写真ともに、男性の写真と女性の写真の区別は行っていない。

[75] 親と子を合わせたデータを用いて、介入後のポジティブな感情の値を被説明変数、介入前のポジティブな感情の値、マスク有画像ダミー、笑顔画像ダミー、子どもの画像ダミー、マスク有画像ダミー×笑顔画像ダミー、マスク有画像ダミー×子どもの画像ダミー、笑顔画像ダミー×子どもの画像ダミー、マスク有画像ダミー×笑顔画像ダミー×子どもの画像ダミーを説明変数とした線形確率モデルの推定を行うと、笑顔画像ダミー×子どもの画像ダミーの係数は正で統計的有意である(有意水準 1%)。また、マスク有画像ダミー×笑顔画像ダミー×子どもの画像ダミーの係数は、有意水準 15%で負で統計的に有意である。このことからも、今回用意した写真の中では、子どもの「笑顔」の写真を見た時に、参加者のポジティブな感情が高まった傾向と、子どもの笑顔の写真を見た場合に、ポジティブな感情が高まる度合いは、マスクを着用することによって、小さくなる傾向が示唆される。

図4.2.2 ポジティブな感情の変化

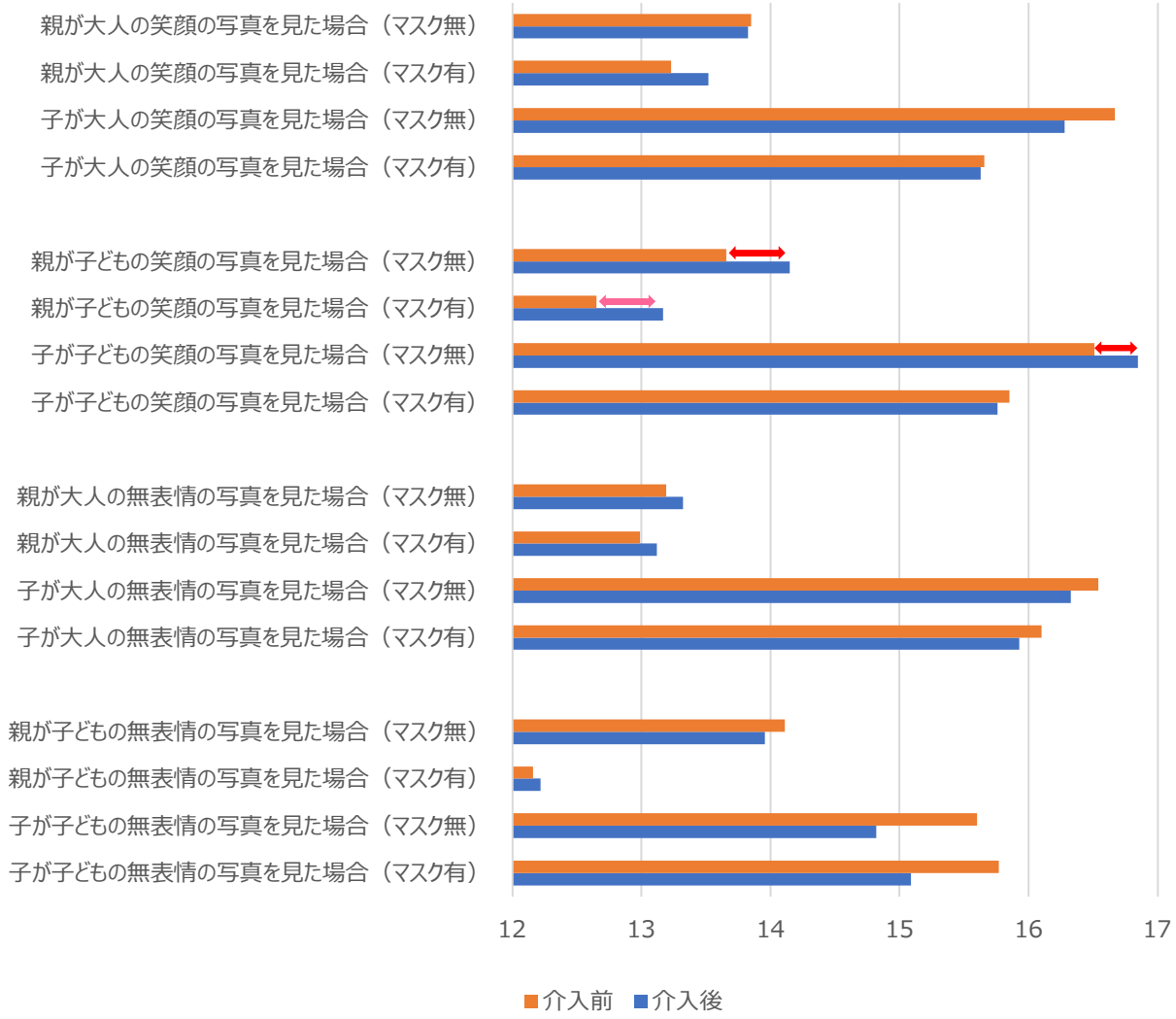


(2) 親が写真を見た場合と子が写真を見た場合のマスク着用のポジティブな感情への影響の違い

さらに、親の回答者がそれぞれの写真を見た場合と、子の回答者がそれぞれの写真を見た場合に分けて、マスク着用の影響を確認したのが、図 4.2.3 である。図 4.2.2 から全体としてポジティブな感情を高めた効果が確認された子どもの笑顔の写真を見た回答者に注目すると、親の回答者の間では、マスクをした写真を見た場合も、マスクをしていない写真を見た場合もポジティブな感情が高まっている一方、子の回答者の間では、マスクをしていない写真を見た場合には、ポジティブな感情が高まったものの、マスクをしている写真を見た場合には、ポジティブな感情はほとんど変わっていないことが確認できる（図内赤矢印はマスク無の子どもの笑顔を見た時のポジティブな感情の増加幅、図内ピンク矢印はマスク有の子どもの笑顔を見た時のポジティブな感情の増加幅）。このことから、子どもの笑顔は、周りの人のポジティブな感情を高めるが、マスクをした場合は、周りの子どものポジティブな感情を高める効果は小さくなる可能性があることが示唆される[76]

[76] 注 75 に記載の推定を、親の回答者と子の回答者のサンプルに分けて行ったところ、マスク有画像ダミー×笑顔画像ダミー×子どもの画像ダミーの係数は、親の回答者のサンプルを用いた推定では-0.33 で統計的に有意でない（有意水準 15%）一方、子の回答者のサンプルを用いた推定では-1.38 で統計的に有意な値（有意水準 10%）であった。このことからも、子の間で特にマスクの影響が大きいことが示唆される。

図4.2.3 ポジティブな感情の変化（親子別）



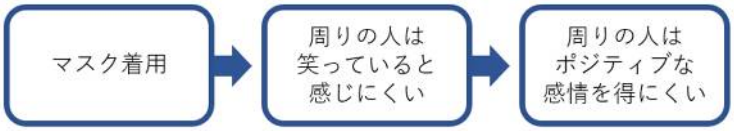
(3) マスク着用の表情認識を通した周りの人の感情への影響

さらに、マスクの着用の表情認識を通した周りの人の感情への影響を確認するために行った追加の分析[77]からは、マスクの着用は、周りの人がその人の表情が笑顔であると感じにくくなることを通して、周りの人のポジティブな感情を高めにくくするというメカニズムがある存在が示唆された（図 4.2.4）。

---

[77] 図 4.2.1 のステップ 3 で画像を見て「笑っている」と認識した場合に 1 をとるダミー変数を内生変数として、被説明変数をポジティブな感情変数、操作変数をマスク着用画像ダミー、笑顔画像ダミー及び笑顔画像ダミー×マスク着用画像ダミーとした 2 段階推定では、第 1 段階の画像を見て「笑っている」と認識した場合に 1 をとるダミー変数を被説明変数とした推定では、マスク着用ダミーの係数は負で統計的に有意（有意水準 1%）であり、2 段階目のポジティブな感情変数を被説明変数とした推定では、内生変数の係数は、正で統計的に有意（有意水準 1%）であった。

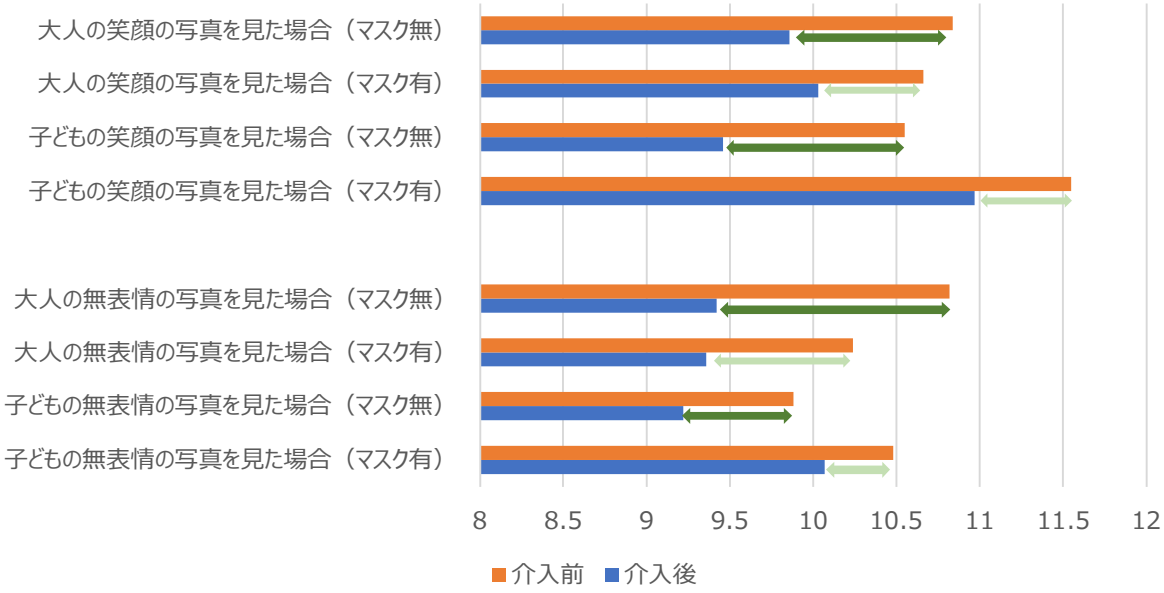
図 4.2.4 マスクの着用と周りの人のポジティブな感情のつながり



(4) マスクの有無とネガティブな感情の変化

次に、「笑顔」の写真か「無表情」の写真か、及び大人の写真を見た場合と、子どもの写真を見た場合について、親の回答と子の回答を分けずに、全体として、マスクの有無によるネガティブな感情の変化の違いを確認したのが、図 4.2.5 である[78]。図 4.2.5 からは、どの写真を見た場合も全体としてネガティブな感情の値は下がっているが、その下がり度合いは、マスクが無い写真を見た場合に比べて、マスクがある写真を見た場合に小さい傾向が見られる(図内の緑色矢印はマスク無の写真を見た場合の減少幅、黄緑色の矢印はマスク有の写真を見た場合の減少幅。どの写真を見た場合も、黄緑色の方が緑色よりも短いことが確認できる)[79]。このことから、マスクの着用は、周りの人のネガティブな感情を下げる効果を小さくする影響が示唆される。

図4.2.5 ネガティブな感情の変化（大人の画像と子どもの画像別）



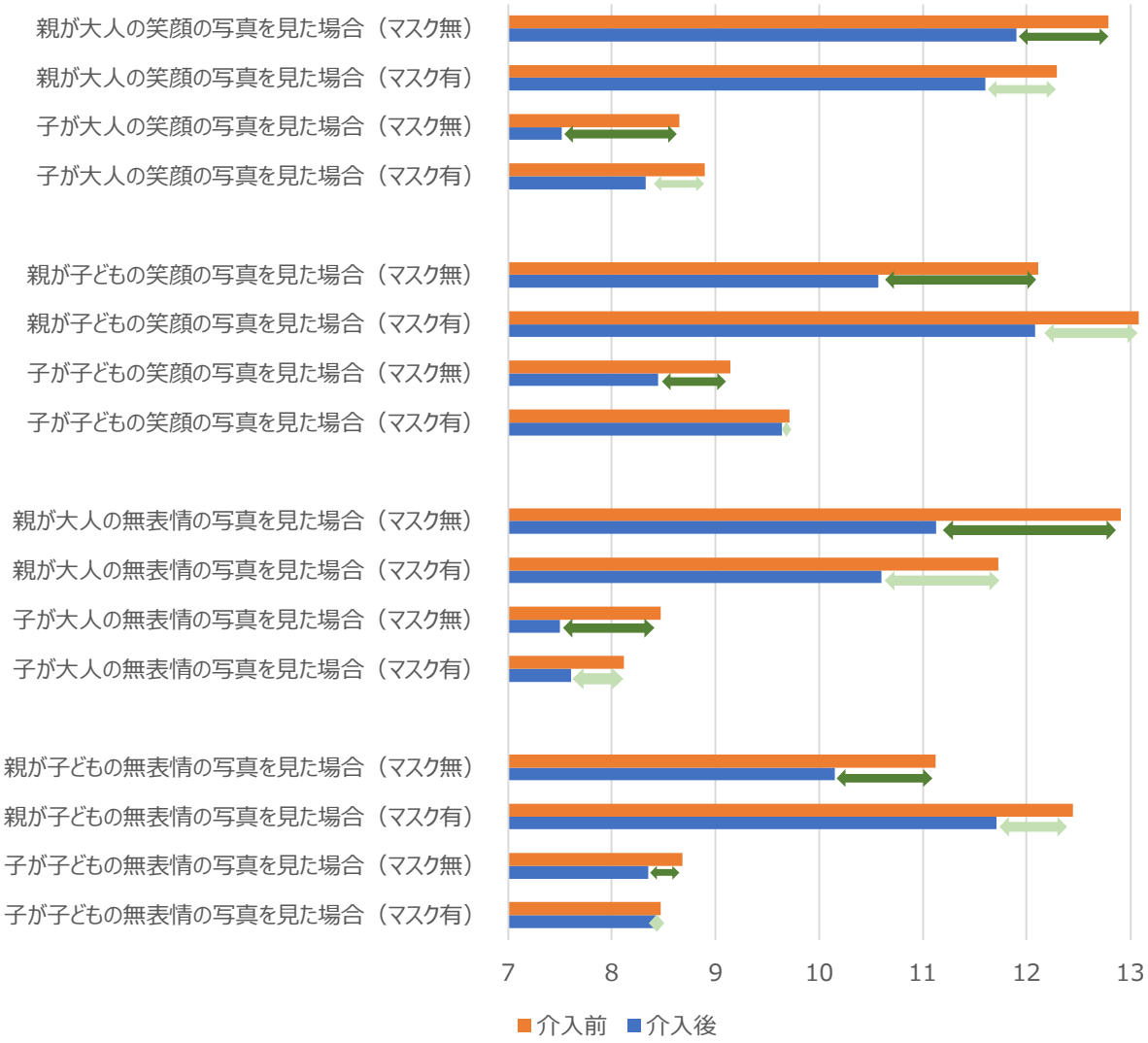
[78] 本項で紹介する分析では、大人の写真、子どもの写真ともに、男性の写真と女性の写真の区別は行っていない。

[79] 親と子を合わせたデータを用いて、介入後のネガティブな感情の値を被説明変数、介入前のネガティブな感情の値、マスク有画像ダミーと笑顔画像ダミーを説明変数とした線形確率モデルの推定を行うと、マスク画像ダミーの係数は正で統計的有意である(有意水準 5%)。このことからも、マスクの着用は、周りの人のネガティブな感情を下げる効果を小さくする影響が示唆される。

(5) 親が写真を見た場合と子が写真を見た場合のマスク着用のネガティブな感情への影響の違い

さらに、親の回答者がそれぞれの写真を見た場合と、子の回答者がそれぞれの写真を見た場合に分けて、マスク着用のネガティブな感情への影響を確認したのが、図 4.2.6 である。この図からは、マスクの着用は、周りの親と子のどちらにとっても、ネガティブな感情を下げる効果を小さくする影響があることが示唆される（図内の緑色矢印はマスク無の写真を見た場合の減少幅、黄緑色の矢印はマスク有の写真を見た場合の減少幅。どの写真を見た場合も、黄緑色の方が緑色よりも短いことが確認できる）[80]。

図4.2.6 ネガティブな感情の変化（親子別）



[80] 注 79 と同様の推定を親の回答者と子の回答者のサンプルに分けて行ったところ、マスク有画像ダミーの係数は、子の回答者サンプルのみを用いた推定では 0.48 で統計的に有意（有意水準 10%）、親の回答者サンプルのみを用いた推定では 0.41 で、有意水準 15%で統計的に有意な値であった。

4.2.4 おわりに

本項では、ニッセイ基礎研究所が、親子 937 組を対象に行った独自のWEB実験を元に、マスク着用の、周りの人々の感情への影響を確認した結果を紹介した。本実験で得られた結果は主に以下の 4 点である。

- 子どもの笑顔は、周りの人のポジティブな感情を高める傾向見られる。
- 子どもの笑顔は、周りの人のポジティブな感情を高めるが、マスクをした場合は、周りの人のポジティブな感情を高める効果は小さくなる傾向がある。特に周りの大人に比べて、周りの子どものポジティブな感情を高める効果は小さくなる可能性がある。
- マスクの着用は、人々に笑顔を認識させにくくすることで、それを見た人々のポジティブな感情を高めにくくさせている可能性がある。
- マスクの着用は、周りの人のガティブな感情を下げる効果を小さくする可能性がある。

マスクの着用は、笑顔が周りの人のポジティブな感情を高める効果や、ネガティブな感情を下げる効果を小さくしている可能性が示唆された。そして、マスクが笑顔のポジティブな効果を減少させる影響は、特に子どもの間で大きかった。多くの学校で長期的にマスク着用が続いている状況が、子ども同士でコミュニケーションに影響を与えている可能性が示唆される結果といえるかもしれない。

5. まとめ

アフターコロナの生活を見据え、マスクの着用について議論が広がる中、マスク着用の常態化が人々の感情認識やウェルビーイングにどのような影響を及ぼすか国内外での研究蓄積は少なく、一致した見解は出ていない。特に影響が大きいと考えられる子どもへの影響の検証を行った研究は、国内でも国外でもほとんど存在しない。そうした中で、本研究では、親子を対象とした大規模 WEB 調査で、親子のコロナ禍でのマスクをつけることや外すことへの感じ方を捉え、WEB 調査に含まれた実験によって、親子のマスク着用の感情認識とウェルビーイングへの影響の検証を行った。

アンケート調査の結果としては、コロナ禍でマスクをつけるようになるという行動変容は、男性よりも女性の間で、そして低年齢層よりも高年齢層でより顕著に起こった傾向が示唆された。また、子どもに持病がある場合は、育児分担割合が大きいほど、外出時に常にマスクをつけるようになった傾向が見られた。加えて、子どもの間でも男子よりも女子の間で、常にマスクをつけている人がより増加した傾向が見られた。

マスクをつけることの不快度合いとしては、男性の間では、感染拡大初期と現在で、マスクをつけることの不快度合いや、マスクを外すことの不快度合いが変化した傾向は見られなかった一方で、女性の間では、マスクをつけることの不快度合いが減少し、マスクを外すことの不快度合いが高まった傾向が見られた。マスクをつけていることについて感じることは、男女で大きな差があり、女性は、感染不安と周囲の反応、さらには、「落ち着く」「自分の顔が見えにくくなる」という理由で「つけたい」という意見が多くみられた。

また、小・中学生の子どもの間では、中学生女子は、マスクをつけることをいやだと感じる人の割合が小さい傾向が見られた。また、小学校高学年の子や中学生は、小学校低学年の子に比べて、マスクをはずすことをいやだと感じる人の割合が大きい傾向が見られた。さらに、親が感じている子のマスクをつけることやはずすことの不快度合いよりも、子が実際に感じているマスクをつけることやはずすことへの不快度合いの方が大きい可能性が示唆された。また、子どもがマスクについて感じることとしては、親と同様に、もっとも多かった意見が「あつい、いきぐるしいからつけたくない」であった。この他、女子で「はずかしいから、つけたい」が 1 割を超えていた。親への調査においても女性で「自分の顔が見えにくくなるからつけたい」が高いことから、見た目についての女性または女子において共通する考え方がある可能性も考えられる。

次に、実験の結果の1つ目としてのマスクの着用の表情認識への影響について、マスクの着用は、それを見た親の回答者にも子の回答者にも、笑っていると認識させにくくする影響が見られることが確認された。そして、マスクの着用がそれを見た人に笑っていることを認識させにくくする影響は、マスクの下で歯の見えるような大きな笑顔をしている場合よりも、歯の見えない表情をしている場合に特に大きい傾向が見られた。さらに歯の見えない表情をしている人を見た際に、マスクによって笑っていると感じにくくなる影響の大きさについて、親の回答者と子の回答者で比較すると、親の回答者が受

ける影響の方が大きい傾向がみられた。そしてこれは、親の回答者に比べて子の回答者は、もともとマスクを着用していない人を見た場合でも、笑っていると認識しにくい傾向によるものである可能性が示唆された。また、マスクを着用していない、歯の見えない表情（無表情）の大人の写真を見た際に、笑っていると感じにくい傾向は、子の回答者の中でも特に低年齢の子の間で顕著に見られた。

実験の結果の2つ目である、マスク着用の周りの人への感情への影響としては、子どもの笑顔は、周りの人のポジティブな感情を高めるが、マスクをした場合は、周りの人のポジティブな感情を高める効果は小さくなる傾向があり、特に周りの大人に比べて、周りの子どものポジティブな感情を高める効果は小さくなる傾向が見られた。また、マスクの着用は、周りの人のガティブな感情を下げる効果を小さくする傾向が見られた。さらに、マスクの着用は、人々に笑顔を認識させにくくすることで、それを見た人々のポジティブな感情を高めにくくさせているというメカニズムの存在が示唆された。

これらの結果からは、多くの学校で長期的にマスク着用が続いている状況が、子ども同士でコミュニケーションに影響を与えている可能性が示唆されるかもしれない。親と子の表情認識やマスクの影響の違いは、コミュニケーション経験の積み重ね年数の違いが原因である可能性が考えられるが、コロナによるマスク着用の常態化の影響も考えられるのか、今後の課題として検討していく必要があるだろう。また、もともと表情認識が大人と大きく異なる可能性があることが示された子どもたちへの、マスク常態化の将来的な表情認識への影響の検討も、今後の重要な課題であると考えられる。

新型コロナ感染症の感染法上の分類の「5 類」への移行が検討される中、今後マスクに対する政府の指針も変化していく可能性がある。コロナ感染による致死率が低くなったとは言っても、今も感染不安を感じている人は多いと思われることから、マスクを着用したい人の意向や子どもたちへの影響を検証・考慮して、社会の中でどのようにバランスをとっていくかということは社会的な課題といえるだろう。